

---

# ～ 碎牙 ～

武泰斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

く 碎牙 く

### 【Nコード】

N 8 4 4 4 Y

### 【作者名】

武泰斗

### 【あらすじ】

魔法と冒険の時代、大国アトモスにある「王立第一魔法学園」でとある少年と少女の再会から物語は動き出す。

## 人物紹介（前書き）

人物紹介です。随時更新予定

本編で語られないキャラ設定もあります。

ただし、ネタバレ注意

## 人物紹介

ゼノ・アルフレイン

物語の主人公

髪の毛：灰色

瞳の色：青

適正属性：無し

《杖》の種類：素手

十歳のときに両親が失踪したため、伯父であるジンに引き取られた。それ以来クローゼ村でそれなりに幸せに過ごしてきた。

幼少時代に周りからいじめを受けていたため、他人を貶める人間が大嫌い。

五年間伯父やその知り合いに散々シゴかれたため運動能力はかなり高い

サンドラ・ルミール

ヒロイン

髪の毛：赤

瞳の色：黒

適正属性：水、樹、雷

《杖》の種類：長杖

ゼノの幼なじみで彼と再会を誓った女の子  
幼い頃から魔法を使うことができたために、当時は周りの子供達に避けられていた。

成績優秀で、さらに美人で性格も良いため、友人関係は良好。三種類の適正属性をもつ。

学園では「紅嵐」と呼ばれている。

ジン・アルフレイン

ゼノの伯父

髪の色：茶色

瞳の色：青

適正属性：火、水

《杖》の種類：カトラス

ゼノの育ての親的存在元冒険者で剣術と攻撃魔法が得意、現在はクローゼ村で狩人をしている。

「おじさん」と呼ばれるのが嫌い。たとえ甥っ子にあたるゼノに伯父さんと呼ばれるのも嫌。ちなみに39歳……おじさんじゃん親と村に捨てられたゼノを引き取ったが、それ以来娘がゼノにベツタリなのが悩み

ミリア・アルフレイン

ゼノの義妹？

髪の色：茶色

瞳の色：翠

適正属性：水

《杖》の種類：鉈（薪割り用）

ジンの娘、始めてゼノと会ったときに一目惚れしたらしい。ちなみに当時7歳。もちろんゼノは気付いて無いが……。父親譲りの剣術と母親譲りの治癒術の才能を持っている。

義妹となっているが正確にはいところ。

ミランダ・アルフレイン

ジンの奥さん

髪の色：水色

瞳の色：翠

適正属性：水、樹

《杖》の種類：短杖

誰にでも優しく料理も出来る美人な万能奥様。ただし、話題が年齢に関するものになると修羅と化す。

村に来たばかりで傷心していたゼノが最初に心を開いた人でもある。ただし、ゼノに自分のことを母さんと呼ばせるのに一年以上かかった。

村長

クローゼ村の村長

以上！！

スズカ・イスルギ

学園の先輩

髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：火

《杖》の種類：鉄扇子

東の最果てにある大和出身。とにかくテンションが高い。中等部の2年から第一魔法学園に編入した。一年ほど前から北地区にある喫茶店でバイトをしている。

世話好きで優しい性分だが、テンションの高さのせいで台無しになっている。

カワイイものにめがない。ちなみに一つ下の学年に妹がいる。

シムジウ・ハング

ギザ野郎改め噛ませ犬

適正属性：火、風

《杖》の種類：ロングソード

自分の嫌いな人物を思い出してみよう。それが彼の外見だ!!  
ちなみに名前を逆から読むと……

ナズナ・イスルギ

サラのルームメイト髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：地

《杖》の種類：???

東国の大和出身。中等部の2年の時に学園に編入してきた。ルームメイトのサラとは親友同士。

ハイテンション過ぎる姉と、何時くるか解らない親友のボケが悩みの種

オルデイン・ラグナー

杖職人

髪の毛：茶色

瞳の色：茶色

適正属性：樹、地

《杖》の種類：槌

「オルデインの武器屋」の店主。鉄製でも木製でも彼にかかれば最高の一品が出来上がる。ただし気に入った相手以外には、店に並んでる地味な商品しか売ってくれない。よく店の扉を一部の学生に破壊されるのが悩み。ちなみに62歳、まだまだ現役。

マルク・マグリット

ゼノのルームメイト

髪の毛：金

瞳の色：碧

適正属性：火、水

《杖》の種類：????

アトモスの隣の聖皇公国出身。運の無さには定評がある。

彼のルームメイトであるゼノは突然ボケをかますため気苦労が絶えない。

適正属性は2つあるが、魔力の総量が少ないため強力な魔法は使えない。また同じ理由で中等部に入学できなかった。

普段は控え目だが、いざとなると頼りになる。

マオ・フェイ

クラスの担任

髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：雷、樹

《杖》の種類：グローブ

高等部1-Dの担任、32歳独身 東国の清出身。

よく授業をサボって合コンに行く……………何でクビにならないんだろっこの人……

ゲイリー・ブリッツ

隣のクラスの担任

髪の毛：青

瞳の色：茶色

適正属性：火、地

《杖》の種類：ナイフ



隣のEクラスの担任、よくマオの尻拭いをさせられる可哀想な先生  
髪の毛が青なのに水属性がないことを微妙に気にしてる  
キレると叫ぶ

## プロローグ

「本当に行っちゃうの？」

少女は泣きそうな眼で目の前の少年にたずねた。

「仕方ないよ、俺みたいな役立たずを引き取ってくれる人なんて他にいないからね……」

少年は少し困った顔をしながらそう答えた。

「違うよ！ゼノは役立たずなんかじゃない！村の皆がゼノの良さを理解してないだけだよ！」

「俺の良さ？そんなの存在しないよ、頭も悪いし魔法の才能も無いし、それに何より……」

少年――ゼノは俯きながら呟いた

「あんな最低な親達の息子何だから……」

「――！……でもそれはゼノのせいなんかじゃ……」

ゼノの両親はつい先日、ある事件を起こして失踪した。

……… たった一人、十歳になったばかりのゼノを残して

「それに村の皆が言ってるよ、『お前みたいな落ちこぼれが村に居座ること自体間違いだ』って」

ゼノには魔法の才能が無かった、それどころか、ひとりに最低一つはあるはずの魔法の『適正属性』すら無いため村の同年代の子供達

からいじめを受けていた、また、彼の両親は息子にほとんど興味を示さず彼とまともに会話を交わすことすら無かった。

ただ一人、目の前の幼なじみだけが彼の唯一の味方だった。

「でもゼノが居なくなったら、わたし…」少女は涙を流しながら力無く呟いた

「大丈夫だよ！……サラならきっと俺がいなくてもやっていけるから。」

「でも！」

「サラには魔法の才能がある。だからきっと、他の皆ともすぐに仲良くなれる。……もう俺を庇う必要も無くなるしね。」

ゼノは、俯いて泣いている少女――サラに微笑んだ

「俺さ、向こうに行ったらおじさんに剣術を習ってみることにしたんだ。」

「？」

「だから約束するよ！次に会うまでに絶対に強い剣士に成るからさ、楽しみにしててよ！…ね？」

「グス………わかった。でももう1つ約束して…」

サラは涙を拭いながら言った

「絶対に…絶対にいつかわたしに会いに来て。」

ゼノは笑顔でそれに頷いた。

「小僧、そろそろ時間だ。」「…はい、わかりました。それじゃまたねサラ…」

「またねゼノ…」

ゼノはサラと最後に微笑みながら別れの挨拶を交わし、魔動車に乗り込んだ

「挨拶はすんだか？」

運転席で男が尋ねた

「うん」

「じゃあ行くぞ」

走り去っていく魔動車をサラはいつまでも眺めていた

「ねえおじさん「おじさんじゃねえ！お兄さんだ！」……………ゴメン。お兄さん」

「なんだ？」

「向こうには何日ぐらいに着くの？」

「…だいたい三日ぐらいだ。」

「そっか、遠いね…」

「だからよお、いつまでもそんなひでえ顔されたらこっちが参っちまうからよ、いまのうちに泣いておけ。」

「!.....グス、うわああああああ!!!!」

ゼノの悲鳴のような泣き声が草原に響き渡った。

## 1話 五年後（前書き）

初投稿の作品なので、へたくそな文ですがよろしくお願いします。

## 1話 五年後

Side:ゼノ

「うん。」

朝か、なんだか懐かしい夢を見た気がする。故郷の「ハング村」を旅立ったときの夢か…

もうあの日から五年も経過したのか、はやいもんだ、あれっきり幼なじみのサンドラとは一度も会ってない。

「まあ、俺のことなんてもう忘れているかもな…。」  
それに気まずいんだよなあ、あのときの約束破っちゃったし

「ゼノ……！朝ご飯できたからそろそろ起きなさい」

下から母さんの声が聞こえた、そろそろ起きよう

リビングにおりたら見知った茶髪の男性が声をかけてきた

「おう！起きたかゼノ」

「おはようおじ「ああん！」…父さん」

この人は「ジン・アルフレイン」五年前に俺を唯一引き取ってくれた人で、恩人であり育ての親でありそして、師匠でもある

ちなみに俺を捨てた父親の弟だから俺の伯父なんだけど「おじさん」と呼ぶとさつきみたいにキレル……今年で39歳のくせに

「まったく、最初からそう呼べばいいんだよ」  
「ははは…」

「おはようゼノ」  
キッチンから女性の声が聞こえる

「おはよう母さん」

この人は「ミランダ・アルフレイン」ジンの奥さんで俺の育ての親。  
よそ者の俺を快く受け入れてくれた頭が上がない人の一人だ。

「まったく、オレのことは今だにおじさんのくせにミランダには母  
さんかよ」

「いや、でも父さんって呼ぶとたまに怒るじゃん」

「オレが？んなことはない。だからちゃんと父さんと呼べ。」

よくいうよ…まあいいや早く席につこう。と思ったら小さめの影が  
背後から突貫してきた。

「おはよう！ゼノにいい！」  
「グボア」

やべ、変な声でた…



「おはよう…、朝から元気だねミリア」

この少女の名前は「ミリア・アルフレイン」元々この家の娘で今年で12歳、五年前俺がこの家に引き取られて以来俺のこと兄としてつてくれている

俺にとっては可愛い妹だ。…元気すぎるけどな、まあいいけど

「え〜と、ところでミリア…」

「なあ〜に？」

「そろそろ離れ「いや！」…いやそう言わずに」

！！ 前方から凄まじい殺気が！

「おい小僧、齒あ食いしばれ。」

「いや、あのと、父さん？」

「誰が！『義父』さんだ！」

「ちよっ！さっき自分で呼べって…！」

「問答無よ「ゴス！」」「ドサッ

「さあご飯にするわよ ミリア、そろそろお兄ちゃんを離してあげなさい。」

「はあ〜い」

母さんの手には角に血糊が付いたまな板がぶらさがってた…まあいいけど…

「それにしても二人共今日から王都に行っちゃうのか……寂しくなるわね。」

「うん……俺も今回ようやく編入試験に受かったからね。」

そうだった、今日から王都にある魔法を学ぶための学校「王立第一魔法学園」に通うために王都に旅立つんだった。

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて発動することができる術のことで魔術ともいう

そして魔力とは、生物が持っている生命エネルギーのことで、これが多いほど強力な魔法が使いやすいのである。ちなみに魔力の総量は修行することによって増加させることができる

## 閑話休題

もちろん魔法の才能が乏しい俺にも魔力は存在するため、簡単な魔法なら使うことができる。はずだ。

ちなみに試験には今までに3回落ちました……

「そつえば学年はどうなるの？まさかふたりとも同じ学年？」

「違うよお母さん、あたしが中等部の一年生でゼノにいが高等部の一年生だから別々だよ。……残念ながらね」

「？最後ボソボソと何か言ったか？」

「べ、べツになんにも！」

あきらかに怪しいな…。まあいいけど

「あらそうなの。でもいきなり高等部から大丈夫なのゼノ？」

「心配いらないよ。むしろ高等部から受けに来る人だっているぐらいだし。」

「まあそれにオレが五年間も鍛えてやったしな ガツハツハ！」  
と父さんが笑いながら続けた

ていうか父さん…いつの間にリカバリーしたんだ？

「でもゼノには勉強できないからあたし心配だなあ…。」

いや妹よ、ハッキリと言い過ぎじゃね

ていうか妹に勉強の心配されるって……………まあべつに…いやよくないか。

「まあ勉強できないのは認めるけどその分は実践科目で補うよ。」

「でもゼノには魔法も苦手じゃん！」

…なんだろう、妹は俺のことが嫌いなんだろうか？

「こちら、ミアそのくらいに下さい。お兄ちゃんが困ってるでしょう。」と母さんが割って入ってきた

ていうか母さん、あなたが心配とか言い出したのが原因なんだけど…。

俺は軽いため息を吐きながら荷物をまとめて部屋に戻った。

## 1話 五年後（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

## 2話 第二の故郷（前書き）

学園までまだまだかかりそうです。

## 2話 第二の故郷

ここは「クローゼ村」、周りを樹海に囲まれた「大国アトモス」にある古びた村である。

その村の入口にたくさんの村人が集まっていた。

「それじゃあゼノ、気をつけて行ってくるんじゃよ。」

「はい、村長！」

「ところで、ミリアは何処にいるのかの？」

この老人はクローゼ村の村長、村人皆に好かれているおじいちゃんである。

「ミリアならそこで友達と話してるよ。」

と、ゼノが指を指した方では、ミリアが同年代の女友達に囲まれ別れの挨拶を交わしていた。

「ゼノ君！王都に行ったら気をつけるんだよ！知らない人について行っではいけないからね！」

「うん、ありがとうお兄さん」

「オッス！ゼノ、お前がいなくなると狩りが忙しくなっちまいな。」

「うん、ゴメンおっちゃん」

「ハッハッハ！！そんな気にすんな！それにしてもたった五年であの『どヘタれゼノ』がこんなに立派になりやがるとはなあ。」

「こら、あんた邪魔だよ！！さつさとどきな！！！！ゼノ、つらい事があっても挫けるんじゃないよ。それからミリアちゃんのことをしっかり守るんだよ！」

「わかりました、おばさん。∴それからもう少しおじさんに優しくしてあげてね。」

（本当にこの村の人はいい人ばかりだ！

よそ者の自分をあたたかく迎え入れてくれただけじゃなくこんなに別れをの言葉をかけてくれるんだから。）

「そろそろ出発します。準備をしてください。」

と学園行き魔動車の運転手が告げた。

ちなみに「魔動車」とは、百年ほど前に馬車に代わる交通方法として発明された魔力で動く馬要らずの馬車である。利点として、交通速度なら馬車よりも格段に速く、さらに馬の休憩も必要としないすぐれものである。



ただし、重い物を運ぶことはできないため、行商人などはいまだに馬車を使用している。

ここクローゼ村にも魔動車はあるが、学園行きの魔動車は王都で開発された最新型なので、村のそれとは比べ物にならない性能なのである。

ちなみにクローゼ村のような王都から遠くの村や町にいる生徒にはこのように王都から迎えがくるのである。

閑話休題

「それじゃ、ミリア行こう!!」  
「うん!」

「ゼノ、ミリア、体につけるのよ?」

「まあアレだ!二人共楽しんでこい!」  
「はい」  
「はい。」

ゼノとミリアはミランダとジンにそう返した。

「それじゃ行ってきます!」

こうして二人を乗せた魔動車は王都を目指して出発した。ゼノ

の第二の故郷をあとにして…

「ところで、わしらは名前すら紹介なしなのかのう…?」

……こうしてゼノは第二の故郷を旅立った。

### 3話 魔動車にて（前書き）

ようやく適正属性についての説明が書けました。

### 3話 魔動車にて

Side:ミリア

あたし達がクローゼ村を出発してから4日目。

いつも日が沈む前に近くの町で宿をとっているから、夕方の僅かな時間だけけど、あたしは3日間ゼノにいと一緒に町を探険したり、お店をまわったりして過ごしていた。

その間ゼノにいと腕を組んで歩きまわった。あたしにとってはちょっとしたデート気分だった。

そういえば、途中ですれ違う人達がたまに、ゼノにいのことを見て小声で「ロリコン」って言ってたけど、どういう意味なんだろう？聞こえる度にゼノには「兄妹です！！」って叫んでいたけど…。

それから、泊まった宿は三つ共すつつつつごく大きな宿だった。運転手さんに聞いてみたら「魔法学園に遠くから通いに来る生徒のために、学園側が事前に予約をとっているんですよ。」って言うてた。

そんな感じで王都までの道のりを過ごしていたんだけど…

「なあ運転手さん。」

「なんでしようかゼノ君。」

「王都には後どれくらいで着くんのだ？」

「またですか…。そうですね、おおよそ3時間ぐらいで着きますよ。」

「ううゝ！退屈過ぎる…。」

今日は朝からゼノにはこんな感じで落ち着きがない。最初の頃は魔動車の窓から景色を見てハシャイでいたのに…。どうやら4日目の最終日に飽きたらしい。

「もゝ、うるさいよゼノにいゝ！」

「ゴメン、でもこうヒマだとどうにも。」

「どうせなら教科書読んで予習してなよ。」

そう言いながら、あたしはカバンから教科書を取り出して、ゼノに差し出した。

「こんな難しいもの読めねえよ…。」

いやゼノにい、いちおうこれ中等部用だよ…。

あたしは仕方なく自分で教科書を読む事にした。

~~~~~

「解説！！はじめての魔法学」

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて意図的に引き起こすことの出  
来る奇跡である。

誰にでもそれぞれが得意とする属性が存在する。この属性のこ  
とを『適正属性』という。

## 第一章

### 第一節 適正属性

適正属性とは、簡単に言うと魔術師個人に最も適した属性のこ  
とをいう。ここで忘れてはいけないのは「適正属性以外の属性も、  
簡単な魔法なら使用することが出来る」ということである。日常生  
活で使われている魔法の多くは、誰にでも使うことが出来る。

つまり、魔術師は適正属性の魔法しか極めることは出来ないが、  
ある程度なら他の属性も使うことが出来るのである。

### 第二節 属性の種類

魔法の属性は大きく分けると5種類ある。

「火属性」

主に火を扱う属性であり、細かく分けると、熱と炎などが  
分類される。

「水属性」主に水を扱う属性であり、氷や霧、そして怪我を治す治

癒魔法などが分類される。

「樹属性」

主に自然に関係する属性であり、風や樹、そして毒魔法やそれを治す医療魔法などが分類される。

「雷属性」

主に電気を扱う属性であり、雷や磁力などが分類される。

「地属性」

主に物質に関係属性であり、地や鉄、そして錬金術などが分類される。

以上の5種類が五大属性と呼ばれる、魔法の基本である。

~~~~~

そこまで読んであたしは本を閉じた。

「うーん、やっぱり魔動車の中じゃあ集中して読めないや。…あれ？ゼノにいい？」

「……………ZZZ！」

……いつの間に寝てる。

「ふあゝあ、あたしも眠くなってきた。」

今内にゼノにいの膝枕で寝よつと

Side out

ゼノ達の4日間の旅もついに終わりが見えてきた。

「ほら、二人とも起きてください。」

「ンア……あれ、どうしたの運転手さん？」

ゼノは眼を擦りながら眠そうに運転手に聞き返した

「ほら見てください。あれが王都の名物のひとつ大城壁ですよ。」

「??……!!!!お、おいミリア起きろ、見てみるよ!」

「もう、なんなのゼノにい……?!」

二人の目の前には高さ20メートルにも及ぶ、巨大な城壁がそびえ立っていた。



「スゴい！！横幅もものすごい長い！！」

「きゃー！スゴい！スゴい！スゴい！」

「王都全体を囲んでいますからね。ちなみにゼノ君が住んでいたクローゼ村が軽く100個は入りますよ。」

「ええええ！！そんなに広いんですか？！」

「もちろん！王都内には学園以外に、もたくさんの施設や住民の居住区、そして宮殿がありますからね。」

「そうか、そういえば王都なんだから宮殿があつて当たり前か……いや、でもさすがに100個つて……。」

「まあ、クローゼ村はあまり大きな村では無いですからね。とてもあたたかみのある優しい村ですが……。」

と、運転手は続けた

ゼノは少し照れながら笑った。

「スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！」

「おーい！ミリアー！そろそろ落ち着こうな……。」

すっかりしてるようでもミリアはまだ12歳の少女なので、始めての王都にハシャイでいた。……………まだ外壁なのに。

- - - - -

そうこうしているうちに、魔動車は城壁にあるひとつの巨大な門の前にたどり着いた。

「はい、じゃあ次の方どうぞ。」

鎧に身を包んでぶしょうヒゲを生やした門番が気だるそうに告げた。

「やあビス！調子はどうだい？」

運転手が親しげに門番に問いかけた。

「よお、誰かと思ったらマルコじゃねえか！ってことは乗っているのは学生さんかい？」

門番のビスはやはり親しげに運転手のマルコに返した。

……………ちなみに、ここまで頑なに「運転手さん」で通してきたが、そろそろ扱いずらくなってきたため諦めて名前を付けた。

閑話休題

「ああ、だから手続きのほうを頼むよ。」

「任せとけ！…よし、そんじゃボウズそれから嬢ちゃん、入学証明を見せてくれねえか？」

門番のビスはゼノとミリアに問いかけた。

「ハイ。えっと……あつた！これでいいですか？」

「おうバッチリだ！そんじゃ…ほら、こいつが許可証だ！」

そう言つて、ビスはミリアに腕輪を差し出した。

「次からこいつを見せてるだけで門を自由にくぐれるからな。くれぐれも無くすなよ。」

「ハイ！……ところでゼノに何してるの？」

ミリアが問いかけると……

「……ヤバイ、入学証明忘れて来た……。」

と真っ青な顔でゼノが答えた。

「ちよっ！どうするのゼノにい！入学式明後日だからもう間に合わないよ！」

「ヤバイ！マジでどうしよう！このままじゃ父さんにシバき倒される！…いや待てよ、今回はかりは母さんまで参戦してくるかも！」

「いやいや、心配する所が違うんじゃないかな？」

マルコが苦笑しながらつつこんだ。

「落ち着けボウズ。アレだ、身分を証明出来るもんがありやあなんとかなる。」

「本当ですか！…ってかホントに！…！」

「ああ、毎年オメエみたいな奴が必ずいるからな。此方も救済措置ぐらい用意してる。」

ゼノは急いでカバンを漁ると中から一枚の金属製のカードを取り出した。

「じゃあこれで！…！」

「だから落ち着けって…。おお、『ギルドカード』じゃねえか。」

ギルドカードとは、冒険者がギルドに所属していることを証明するカードで、個人の名前やレベルが記載されている。

ギルドやレベルについての説明はまたいずれ。

## 閑話休題

「ボウズ冒険者だったのか？どれどれ……！！！」

「…あ、あの…何か問題でもありましたか？」

ゼノが恐る恐るきいてみると

「……い、いや大丈夫だ！えっと名前は『ゼノ・アルフレイン』だな、え〜と……お！ちゃんと名簿に名前が乗っているな」

「そんじゃあ…ホレ、ボウズの分だ。ところで……」

ビスは腕輪を渡しながらゼノに問いかけた。

「学園に通っていた訳じゃねえのに、なんでギルドに冒険者登録してたんだけ？」

「べつに大した理由じゃないですよ。故郷がド田舎にあるから、冬の間はそれぐらいしか稼ぐ方法が無いんですよ。あと修行も兼ねて…というか学園とギルドって何か関係あるんですか？」

「ああ！授業の一環としてギルドでクエストを受けてるからな。もつとも、高等部からだが。」

「さてと、ボウズその腕輪絶つつつ対に無くすなよ！」

「うっ、わかりました……」

こうして一行を乗せた魔動車は門をくぐっていき、ようやく王都への旅に終わりを告げた。

走り去っていく魔動車をビスは眺めていた。

「あの灰色の髪の人にあのギルドカード、……あれが噂の『牙折り』か。」

門番の呟きは風に流されて空に消えていった。

### 3話 魔動車にて（後書き）

王都到着。……………何時になったらヒロイン出てくるんだろう。

## 4話 王都到着

ゼノとミリアは、運転手のマルコに別れを告げ、学園を目指して歩いていたが――

「それにしても……スゴいね。」

「ああ、ものすごい広いな。……で、ここは何処だろう?」  
――さっそく道に迷っていた。

ここ「王都アトランド」は、大国アトモスの南部にあるこの国最大の都市である。

都市内は北、南、東、西、そして中央の五つの地区で成り立っている。

ちなみに第一魔法学園が在るのは西である。

ゼノ達は、北の城門から王都入りしたため、現在北地区にいるのだが

「えつと、向こう側が西地区のはずなんだけど……建物が邪魔で進めないし」

彼等がいる北地区は、商人や冒険者がよく訪れるため、あらゆる店や宿が密集しており、迷宮と化していた。

ちなみに冒険者ギルドもここ北地区に居を構えている。



「ゼノにい…お腹すいた……」

「そういえば、昼飯はまだだったか？  
しょうがない、その食堂でメシにしよう。」

ゼノは近くに在った、少し大きめのキレイな食堂を指差したて言った。

- - - - -

カランコロン

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

店に入ると同時に、ポニーテールの女の店員が笑顔で訪ねてきた。

「え、えゝと に、二名です…「ただいまカウンター席しか空いて  
ませんがよろしいですか！」」

「ハ、ハイ「それではこちらの席へどうぞ!!」「……」

二人は店員の勢いにおされながらもあとに続いた。

「いらっしやいませ。ご注文が決まったらこちらへお声をおかけください。」

カウンター席に座ると、正面からダンディな男の店員が声をかけてきた。

「すみません、その前に少し聞きたいことがあるんですが良いですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

ダンディな男は渋い声で答えた。

「えっと、第一魔法学園に行きたいんですけど道に迷ってしまつて……。よろしければ道をききたいのですが……。」

「なるほど。王都に来たのは始めてですか？それなら「あれ！君達魔法学園の生徒なの！？」

ゼノとダンディが会話をしていると、先ほどの店員が勢いよく割り込んできた。

「ええ。先ほど王都に到着したので学園に報告に行こうと思っていて……あなたも第一魔法学園の生徒なんですか？」

「もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！」

ゼノの問いに店員は元気に答えた。

「それならスズカさん、もう少しで今日のバイトは終わりですし、彼等を学園まで案内してあげてはどうですか？」

ダンディはエエ声芸人並の渋い声色でそう提案した。

「そんな！ さすがにもうしわ」それはいい考えね！そうしまし  
う！」「け…な…い？」

スズカと呼ばれた店員は即断した。

「いえ、でも「いけない！注文が入ったんだっ！ それじゃまた  
後で！！」…いつちゃったよ。」

「お腹すいた……。」

さつきからまったく会話に参加してなかったミリアが呟いた。

- - - - -

「「ごちそうさまでした！！」」

「それではお会計は合計1000Gゴールドです。」

ゼノは財布から500と書かれた金貨を二枚取り出した。

「それでは、ちょうど1000Gいただきます。 ありがとうございます  
いました。またのご来店をお待ちしております」さあ！それじゃ行き  
ましょう！！ お疲れさまでしたバイトリーダー！！」「…お疲れさ

までしたスズカさん。」

「言わせてあげよう！…あと一文字ぐらい言わせてあげよう！…」

ゼノは腹の底から声を張上げてツッコミをいれた。

「…あのおじさん、バイトだったんだ…。」

ミリアはボソツと呟いた。

## 5話 学園まで（前書き）

ようちんく学園に着きます

## 5話 学園まで

Side:ゼノ

食堂を出てから俺達は、北地区の『ゲート』に向かっていた。

そもそもクローゼ村の100倍以上の広さの王都を、歩いてまわるのは無理があるそうだ。……冷静に考えればたしかにそうだ。

そこで都市を行き来するために用いられるのが、「魔術式転移門」通称『ゲート』だそうだ。

「ゲートは大昔に存在したと言われている『時空間魔法』の研究中に偶然実用化に成功したという、王都が誇る大規模魔法陣なのよ！」

と、さつきスズカさんに質問してもいないのに説明された。

しかもドヤ顔で……けっこうイラっときた。

「ゲートはそれぞれの地区に3つあって、それを使って都市内それぞれの地区に行くことが出来るのよ！」

と、ドヤ顔のまま続けてきた。

どうでもいいけど毎回あんな大声をだして疲れないんだろうか？

そして現在――

「ほら！あそこの店が雑貨屋でそっちの店が防具店よ！！ あ、心配しなくても西地区に行けばもっと可愛いお店もあるからね！！今度いっしょに行こうねミリアちゃん！！」

「あの…その…あうう…」

- - 妹が、ものっそい勢いで絡まれてます。  
どうしてこうなったんだっけ……？

く回想中く

「それじゃ！まずは自己紹介から！私はスズカ！スズカ・イスルギよ！出身は東国の大和！《杖》はこの扇子！それから…」

と、やはりこっちが何か喋る前に、一方的に情報をぶちこんできた。

「…で！趣味は…！あと…は…で！そういえば最近…」  
「もう大丈夫です！！」

「そう？ まあ私だけが話しててもしょうがないもんね！」

すでに十分過ぎるぐらいにしゃべくり倒してんだろぅが！！！！

と内心思っていたけど

「ええ、そうですね。」

この時まったく態度に出さなかった自分を誉めてあげたい。

「ゼノ・アルフレインといいます。 明後日から高等部の1年になります。」

「じゃあ私の方がお姉さんなんだ！ 『スズカお姉さん』 って呼んでねー！」

「いえ、さすがにあれなので遠慮させていただきます。」

「そ、そう……。」

あれ？ ちよつとへこんでる？

「まあ、そこはこれから話し合っていけばいいか……。」

そこは諦めてくれ！

「えつと、じゃあスズカ先輩で。」

「先輩？ そつか先輩か……それもいいわね！！ これからは私のことをスズカ先輩と呼んでいいからね！」

復活しやがった……。 まあいいけど……。

「それじゃ早く続きを聞かせて！」

止めたのはあなたです。

「そうですね…… 出身はアトモスのずっと北の方にあるクローゼ村



です。えつと……以上です。」

「えゝそれだけ！？もつと趣味とか教えて！ね」

ね　と言われても…

「…ちよつとあなた、いい加減にしてください！！　さつきから  
ゼノにいつきまとして！何なんですか！？」

「こらミリア、そんなに怒らなくてもいいだろう…。」

妹よ、よく言った！

「うつ、　うん…ごめんなさい…」

ミリアはしょんぼりして謝った。

「！！…か、かかか…」

あれ？どうし「カワイイ」…！！　なにこの娘！スッゴクカワイイ  
！！」

「「え？」」

「お名前は！？」

「ミ、ミリア・アルフレインです…。」

「今何歳！？」

「えつと、12歳で…。」

「じゃあ中等部の1年生になるんだ！！」

「あの、はい…。」

「私のことは『スズカねえ』または『ねえね』って呼んで!」  
「それはちよつと……」  
「好きな食べ物は!? それから……」

〈回想終了〉

〈side out〉

何故かミリアのしょんぼりした姿と、その前のゼノ「にい」という言い方がツボだったらしい。

「いいこと思いついた! 今度私の部屋に遊びにおいでよ!」ミリアちゃんに似合いそうなカワイイ服がいっぱいあるから!」

「そういえば先輩、ゲートって始めてなんですけど、どんな感じですか?」

さすがにミリアが心配になり助け船をだすゼノ

「え! そうね…それは見てのお楽しみかな! もうすぐ着くから楽しみにしててね さあ行きましょう!」

なんとか救出に成功したようだ。

「……ミリア、今度から人前では兄さんと呼ばうな?」

「わかったゼノに…お兄ちゃん。」

兄妹は約束を交わした。

そんなこんなでゲートに着いた三人

そこには地面に巨大な魔方陣が3つ描かれていた

「ほら！あの魔方陣がゲートよ！ゲートは30分に一回のペースで起動するようになってるのよ！」

「へー、それにしてもすごい人の数ですね。」

「もうすぐ午後5：30だから東地区の居住区に行く人がほとんどだけだね！」

「あれ？でも真ん中の魔方陣だけ人が少ないね。」

「んふふふ　よく気付いたね！二人共気をつけてね・・・」  
スズ力は珍しく少し引き締まった表情で説明した。

「・・・南地区は貴族街だから貴族や一部の商人以外立ち入り禁止なのよ・・・」

「へえー、なんで南地区に貴族が集まっているんですか？」

「それはね！・・・えっと、あれ！？ねえ、なんだったつけ！？」

ゼノの質問に、スズ力は何故かミリアに答えを求めた。

「えっ！ いや、あたしに聞かれても…。」

「ということだからゼノ君！ ごめん わからないや」

この時ゼノはいまさらだがふと思った…。

（この人メンドクセー）

無駄話をしているうちにいよいよゲートの起動時間になった。

ゼノ達がいる西地区行きのゲートはそれほど人がいなかったが、2  
つ隣の東地区行きのゲートはとても混雑していた。

「もう少し詰めてください！」「いでっ！ てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちよつと！ あんた今私のお尻触ったでしょ！！」「えっ！？ 違う！ 僕じゃない！ 本当だ信じてくれ！！」「……！！ゼ！ いでっ！ てめえ！！ 今度はスネを蹴りやがったな！！」「それでは…ゲート起動！！」

次の瞬間、広場は静寂に包まれていた。

いや、広場自体が変わっていた。

「到着……！ さあ学園を目指しましょう！ 学園までは真っ直ぐだ

から迷う心配は無いけどね！」

「いやいや！ちょっと待ってください！今なにが起きたんですか！」

「一瞬であの人達居なくなっちゃった…。」

狼狽える二人に対して、スズカは――

「ああ、大丈夫だよ！西地区のゲートに移動しただけだから！」

と告げた。

「あんな一瞬で？」

「これが王都か…。」

と、よくわからない結論をだす二人だった。

――

「さあ、着いたよ！ここが第一魔法学園よ！」

目の前には石造りの巨大な建物が建っていた。

「――すごい…。」

「――王都に着いてまだ数時間しか経ってないのに……一生分驚いた気がする。」

田舎育ちの二人にとって、学園はものすごい迫力があつたようだ。

「後はその受付のおばさんに聞いたら学園と学生寮までの地図をもらえるからね!!」

「あっ!はい、わかりました!」

「どうもありがとうございます。」

「どういたしまして! 何かあったら何時でも頼ってね!それじゃ!またね!」

そう言うとスズカは去っていった。

「悪い人では無いんだよね……」

「疲れるけどな……」

二人はそう呟いて、その背中を見送った。

## 6話 Another side

Side:????

~~~~~

『本当に行っちゃうの?』

『でも!』

『もう1つ約束して...』

『絶対にいつかわたしに会いに来て。』

~~~~~

………今のは？

そうだ、あの時の――

「――夢？」

わたしは寝ぼけ眼を擦りながら、部屋中を見渡した。

「ここは？」

えっと……そうだ、思い出した。

ここは王都アトランドの東地区にある学生寮だ……

故郷のハング村から三日かけて、昨日の昼間に王都に着いたんだっ  
た。

「ハング村か……」

わたしは自分の故郷のその村が大嫌いだ。

小さい頃、わたしは周りの子供と比べて魔法の才能があった。

5歳の時に適正属性を調べたら属性が3つある事がわかった。

6歳の時にはすでに基礎魔法が使えるようになっていた。

わたしが周りの子供から爪弾きにされたのはその辺だった。

誰もわたしと会話をしようとしなくなった。その内、目も合わせて  
くれなくなった。

それどころか酷い時は化物と言われることもあった……ただ一人を  
除いて……



そのくせ、3年前にわたしが第一魔法学園中等部の受験に受かったら周りの態度は一変した。

それまでわたしを除け者にしてた村の子達は途端にわたしに集まってきた。

正直、気味が悪かった。自分のことを打算的な目で見られている気がした……あの人がいたらきつと心の底から喜んでくれたんだろうな…。

「やめよう、朝から…。」

どうやら昔の夢を見たせいで嫌なことを思い出しちゃった。

「さあ、今日も1日頑張ろう!」

まあ、学園が始まるのは2日後だけだね。

ガチャ――

ドアが開く音がしたから見てみると、そこにはさっきから姿の見えなかったルームメイトがいた。

「おはよう! ナズナちゃん!」

「おはよう。もう昼だけだね。」

「えっ、うそ！」

わたしは慌てて時計を確認した。

「ホントだ！もう何で起こしてくれなかったのお母さん！？」

「いや、誰がお母さん？」

- - - - -

わたしは北地区にある「オルディンの武具屋」に向かった。

- - バタン！

「おはようお爺さん！」

「うるせえぞ赤頭！！もつと静かに入れ！！それから世間ではすでに『こんにちは』だボケ！」

この、王都では珍しい着流しを着たお爺さんは《杖師》のオルディンさん、アトランドの知る人ぞ知る名物職人 - -

「誰が名物だ！！」

- - もとい名職人

「まったく、久しぶりに顔を合わせたと思ったら……それに若いくせにこんな時間まで寝やがって……」

「そ、そんなことないですよ………？」

「その『?』は何だ?……まったく、寝癖ぐらい直してからこい。」

オルディンさんは羨望の眼差しでわたしの赤い髪の毛を見ている。

「何適當なこと言ってるんだ!!! 呆れてんだよクソガキ!!!」

「そんなことよりオルディンさん、頼んでいた《杖》は?」

「このっくく!!! たく! ちよつと待ってる」

そう言うオルディンさんはカウンターの奥へ入って行った。

「ここで《杖》について説明すると、《杖》とは魔術師が魔法を使用する時に使う道具の総称のことで、昔は全て杖を使用してたからその名残らしい。

今では、魔術師個人によつて使用する《杖》は異なり、人によつては剣や盾を《杖》として使用している場合もある。」

「……で、誰に説明してんだ?」

いつの間にかオルディンさんは戻って来ていた。

「いや、退屈だったからつい。」

「……とにかく、ほら! オマエさんの注文通りの仕上がりだ。」

そう言いながら、オルディンさんは木製の長杖を手渡してくれた。

「柳の枝を削って作った一品だ。クセはあるが、まあオマエさんなら大丈夫だろう。」

「ありがとう！」

「なあに、構わんさ。今年からギルドでクエストを受けるんだろう？また何か必要になったら何時でも注文しにこい。前払いしか受け無いけどな。」

「うん！それじゃ！」

「オウ！」

わたしはオルディンさんに別れを告げて店を出――

「あ、その前に」

――る直前で、さっそく新しい《杖》で風魔法を使って寝癖をなおした。

「……もっとマシな使い方をしろよ。」

――

わたしが上機嫌で店を出ると――

「これはこれは、ルミールさんではないですか。」

突然ギザッたらしい口調の青年が話しかけてきた。

「……何か用かしら？」

こいつはシムジウ・ハング、名前から解るようにハング村の出身で、  
ついでに村長の孫だ。

「いえいえ、偶然見かけたので挨拶をと思ひましてね。」

シムジウは不愉快な声で続けてきた。

「どうもご機嫌がよろしいようですね？」

あんたに声をかけられるまではね……

「貴方には関係ないでしょう？」

わたしは冷たく、そう言った。

「おや、その長杖は？まさかとは思いますが、またあんな小汚い老人の店で購入したのですか？」

「それがどうかしたのかしら？オルディンさんはとても腕のいい職人よ。」

「冗談でしょう？この僕の依頼を断るような老人ですよ？」

「あいにく、オルディンさんは客を選ぶのよ。」

「ふん、この天才の僕以上にふさわしい客がドコにいますか？」

誰が天才なんだか…… 3年前に学園に受かる前は散々わたしのことを化物と罵っていた癖に。

「たくさんいるわよ。……それに貴方以上の実力を持っている人はもつというわ。」

実際にこいつは学年で中堅程度の実力だし、そのうえ今年から高等部になるから人数は倍近くになるというのに。

「っそんなもの！僕の才能が目覚めるまでの間だけだ！」

なにそれ？新しいギャグのつもりかしら？

「……コホン、失礼しました……。どうですか？お詫びにこれから一緒に食事でも。」

「遠慮しておくわ、さっき食べたばかりだから。」

「そうですか。それもそうですね、もう4：30ですしね。」

「それじゃあさよなら。」

わたしはそう言い放ってその場を後にした。

……というかもう4：30だったんだ。朝も昼も食べてないからお腹すいた。

- - - - -

「ここにしようかな。」

わたしは「喫茶アルバトロス」と書かれた扉を開こうとして・・

『あれ！君達魔法学園の生徒なの！？』

(……今の声は)

『もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！』

踵を返してその場を立ち去った。

うん、別の店に行こう！

- - - - -

「……た、食べ過ぎた。」

わたしは呟きながらゲート向かった。

起動まで、あと少し。

あの後近くの食堂で遅めの朝食兼昼食を食べた。あの自称天才との

会話のせいでストレスがたまってたからヤケ食いしてしまった。  
体重は……大丈夫だよな？朝は食べてなかったし。

そんなことを考えているうちにゲート着いたら――

「もう少し詰めてください！」

――今まさにゲートが起動しそうになっていた。ってヤバイ！

わたしは慌てて魔法陣に駆け込んだ、途中で何かを踏んだり、長杖が誰かにぶつかった

「いでっ！てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちよっと！あんた今私のお尻触ったでしょ――！」

ヤバイ、大事になってる……

わたしは気まずくなり目をそらした。

その時ふと、西地区行きの魔法陣が目に入った。

「――！！！」

あの灰色の髪の毛は――

「ゼノ――！！！」

わたしは咄嗟に叫んだ。けど……

「それでは……ゲート起動――！！！」



その直後魔法陣が淡く光り、一瞬で東地区に移動していた。

「警備員さん！！この人痴漢です！！」「なっ！！だから違っ！」「うるさいわね！！犯人は皆そう言うのよ！！」「さっきからうつせえぞそのババア！！心配しなくてもてめえを触るゲテモノ好きなんざ居ねえよ！！」「何ですってー！」

見間違えたのかしら？……でも、もしかしたら…。

それはともかく…

「ごめんなさい。わたしの長杖が当たっちゃったみたいで…」

とりあえず誤解を解いておこう。

- - - - -

「はあ…」。

あの後、次のゲート起動で西地区に行き、1時間近く探し回ったけど結局見つからなかった…。

「はあ…」。

わたしはもう一度ため息を吐いた。

やっぱり見間違えたんだ…。

わたしは寮に帰り、部屋のドアを開けた。

「お帰りサラちゃん！もう、遅いから心配したよ〜〜〜！」

わたしはナズナちゃんに謝ってからベッドに倒れこんだ。

今日は疲れた。

## 6話 Another side (後書き)

6話目にしてやっとヒロインをだせました。

ぜんぜん再会してないけど……

## 7話 擦れ違い

＼side:ゼノ＼

さて、今日の予定はと…

「とりあえず西地区は学園が始まってから行けばいいか。」

よし！今日は王都の冒険者ギルドに行こう！

＼side:サンドラ＼

今日はちゃんと午前中に起きた。

そういえば、休暇中にギルドに登録するように言われてたっけ。

よし！今日はギルドに行こう！

「ねえ、ナスナちゃんはもうギルドに登録した？」

「え、そういえば忘れてた。」

「じゃあこれから一緒に行く？」

Side out

- - - - -

第一魔法学園の学生寮は十階建ての建物であり、入って右側が男子で左側が女子に別れている。

また、2～4階が中等部、5～10階が高等部となっている。

ちなみに学生寮は全部で5つあり、それぞれ五大属性の名前を一つずつと呼ばれている。

30分後・『火の学生寮』一階ロビー

「ミリアのやつ遅いな…」

すると、女子部屋の方から

「あら？えっとおはようございます。」

ナズナが降りてきて、ロビーにいたゼノに挨拶した。

「あ、どうもおはようございます。」

「あの、新しい管理人の方ですか？」

と、ナズナはゼノに質問した。

「え？いや、一応生徒ですけど…。」

「そうなんですか？すいません、制服を着ていなかったからつい…。」

現在のゼノの服装は、ごく一般の冒険者が着る魔物の皮製の茶色いズボンと布の赤いシャツの上に黒いレザージャケットを羽織ったものである。

対して、ナズナは学園の制服である。

「やっぱり制服を着ていないと不味いですか？」

「いえ、そういうわけではないですよ。」

と、そこへ

「ごめーん！まった？ぜ…お兄ちゃん！」

ミリアが降りてきた。もちろん制服姿で。

「お兄ちゃん、どう？あたしの制服」

「ん？ああ、よく似合ってるぞ。」

「えへへ　ところで、お兄ちゃんは制服着ないの？」

「そうだな…ちよつくら着替えてくるわ。えっと、それじゃあ失礼します。」

そう言うときゼノは階段を上っていった。

「あの、おはようございます。」

ミリアはナズナに挨拶をした。

「おはようございます。貴女は？」

「はい！はじめまして、今年から中等部の一年になるミリア・アルフレインといいます。」

「そっか入学組なんだ。はじめまして、私は高等部の一年でナズナ・イスルギっていうの、よろしくねミリアちゃん。」

「こちらこそ宜しくお願いしますナズナ先輩。」  
(あれ？イスルギってどこかで聞いたような？)

もちろんヤツのことである。

「ところで、入学組って何ですか？」

「入学組っていうのはミリアちゃんみたいに、中等部の一年から学園に通っている人のことよ。ちなみにそれ以降に学園に通っている人は編入組と呼ばれているわ。高等部から通う人もそうね。」

「ナズナ先輩はどっち何ですか？」

「私は中等部の二年からだから編入組よ。」

と二人が話し合っている内に

「ごめーんナズナちゃん！お待たせ！」

サンドラが階段を降りてきた。

「もう、遅いよサラちゃん。」

「ごめんね。靴下が見当たらなくて……あら？その子は？」

「この子は新生のミリアちゃんよ。」

「へえ、新生なんだ。わたしはサンドラ・ルミール、ナズナちゃんのルームメイトよ。気軽にサラって呼んでね。よろしくミリアちゃん！」

「こちらこそよろしく願いますサラ先輩。」

「ねえ、もしよかったら一緒に来る？王都を案内してあげようか？」

とサラは提案したが

「すみません、実は今日は寄るところがありまして……それに兄もいますし。」

「そっかあ残念。それじゃまたねミリアちゃん」



そう言うと二人は寮を出ていった。

タッタッタッ……

「お待たせ！ごめんごめん、ベルトが見つからなくて！」

「遅いよゼノにい、早く行こう！」

遅れること5分、ようやく二人も寮を出た。

- - - - -

「ナズナちゃん！あと1分しかない、急いで！」

「もう、サラちゃんが遅れるから！」

二人がゲートに着くと同時に

「それでは、ゲート起動！」

魔法陣が淡く光だして転移魔法が起動した。

一方、

「ゼノにい、あと1分しかないよ。」

「仕方無い、次の起動時間までその辺の食堂で朝飯食べてようか。」

- - - - -

所変わって、冒険者ギルド

冒険者ギルドとは、大国アトモス、東国、そして西にある聖皇公国の三ヶ国に支部が点在する「国境の無い冒険者組織」のことである。

閑話休題

「着いた！」

「いつ見ても大きな建物だね。入るのはじめてだけど。」

サラとナズナの目の前には、石造りの建物があった。

高いは4階程度だが一階辺りの面積は、他の建物の2・5倍ほどあ

る。  
入口にある「剣と長杖を交差した標識」が冒険者ギルドの紋章である。

二人が入ると、中は騒音が響いていて女性職員が慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたの君達？まだ学生でしょ？」

「？ 今年から高等部になるので登録しに来たんですくど。」

すると職員は困ったように・・・

「じゃあ、とりあえずこっちに來て。」

二人を階段の方へ促した。

階段を上る前にサラがチラリと1階を見てみると、1階は酒場になっていた

一行は2階の受注所にやって來た。ちなみに3階は資料部屋、4階は関係者以外立ち入り禁止となっている。

そのまま奥にあるテーブル席に着くと、先ほどの職員が口を開いた。

「ごめんね、今下の酒場でパーティー間で言い争いになっているところなのよ。」

「なるほど…」

「じゃあ、担当者と呼んでくるからちょっとまってね。」  
そう告げると職員は受付の奥に歩いて行った。

サラが周りを見渡してみると、近くのテーブルで学園の制服を着た男の子が別の職員に何かが書かれた紙を手渡しているのが目に入った。

そのうち、メガネをかけた男性職員がやって来た。

「お待たせしました。それではこちらの紙に必要事項をお書きください。」

そう言って二人に一枚ずつ紙を手渡した。

紙には名前、適正属性、《杖》の種類などの項目が書かれていた。

「あ、あの質問しても良いですか？」

記入しながらナズナが控えめにきいた

「名前はわかるんですけど、なぜ適正属性や《杖》の種類を書く必要があるんですか？」

「ああ、それは冒険者どうしがパーティーを組むときの目安になるし、何より成り済まし防止の意味があるんですよ。」

「成り済まし…ですか？」

「ええ、極希にそういったことをする迷惑な冒険者がいるんですよ。」

と職員は答えた。

それから暫くして

「よし、書けた！ナズナちゃんは？」

「うん、私も今書けた所。」

「それではお預かり致します。ギルドカードの作製には少し時間がかかりますのでご了承ください。」

「わかりました。」

「それじゃ、上の資料室で時間を潰してようか。」

そう言って二人は階段を登って行った。

その頃一階では、

「このクソガキ！覚悟はできてんだろぅな！！」

灰色の髪の毛の少年が酔っ払いに絡まれていた。

「どうしてこうなった……。」

少年は何の面白味もないテンプレなセリフを呟いた。

## 7話 擦れ違い（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

## 8話 邂逅

話は少し前にさかのぼる

（side：ゼノ）

朝食を食べ終えたからゲートを使って北地区にやって来た。

「そついえはゼノにい、ギルドに何しに行くの？」

「昨日門番のおじさんが高等部は授業の一環としてギルドでクエストを受けるって言ってただろ？だからどんなのがあるか確認しておきたくてさ。」

「ふーん。」

「それよりミリアは何処に行きたい所でもあるのか？」

「あたしは武器屋に行きたいな。」

「新しい《杖》でも買うのか？」

「うん。さすがにいつまでもこれは…ね。」

そう言いながらミリアは腰に携えている物を指差した。

たしかに学園でそんな物使っていたら『自分田舎者ですよ』と大声



で叫ぶようなもんだしな。

「よし！それじゃ先に武器屋に寄ってみるか！」

「いいの？」

「ま、可愛い妹のためだしな。」

「そんな！可愛いだなんて！！……えへへ……でも『妹』としてか  
…。」

ミリアは顔を赤くしたと思ったら、今度は何かを呟きながら俯いた。  
体調悪いのか？

「どうした？風邪でもひいたのか？」

「大丈夫…ちょっと複雑な心境になっているだけだから…。」

「そうか？無理するなよ。」

さてと、昨日スズカ先輩に教えてもらった武器屋はと…。

- - - - -

「なんか期待はずれだったね。」

「だな。」

武器屋で扱っていた武器は、ほとんどが量産品のナマクラばかりだった。

「どうする？あと近くにあるのはその怪しげな店しかないぞ。」

看板には掠れた文字で「オルディンの武具屋」と書かれていた。

「うーん、どうしようかな？」

やっぱり躊躇するよな。

「ダメモトで行ってみる。」

「わかった。」

- - - - -

ギギギギギ……

「……扉の立て付け悪いな……」

俺は思わず呟いた。

「でもゼノにい、売ってる物はさっきの店よりも良さそうだよ。」

見てみると、地味だが丈夫そうな武器や防具が並んでいた。

「ほう、よくわかってるじゃねえかお嬢ちゃん！」

奥から毛むくじやらなお爺さんが出てきた。

「気に入った物はあったか？」

「そうですね……できるだけ軽くて丈夫な剣はありますか？」

お爺さんがしゃべりかけてきたからミリアが質問した。

「あん？レイピアじゃ駄目なのか？」

「突くための剣じゃなくて切るための剣が欲しいんです。」

ミリアはおじさん、いや父さん直伝の剣術を使うからな。

「《杖》用の武器か？」

「はい。」

「じゃあ今使ってる《杖》を見せてみる。」

「え！えっと…あの…これです。」

ミリアは恥ずかしそうに自分の《杖》をカウンターに置いた。  
さっきの店で見せた時は店員に変な眼で見られたからな…

「鉈とは変わったもん使ってるな。」

ミリアは腕力がなく普通の剣では重すぎるため鉈（薪割り用）を使ってる。

「うーむ、なるほどな…」

お爺さんは鉈を一通り観察して、口を開いた。

「おし！ 気に入った！ お嬢ちゃん、《杖師》の名に賭けてオマエさんにピッタリな《杖》を打ってやる！」

「ホントですか!？」

「《杖》の手入れが行き届いてるからな。逆にワシは《杖》をだいにしない奴には売らんがな。」

ずいぶん職人気質なお爺さんだな…

「それとこのボウズは何か買うのか？」

「え？ いえ特には」

「とりあえず《杖》を見せてみる。」

仕方ないな…

俺はポケットにある物を取り出した。

「あ？ 何だこりゃ？」

「何って、ただの金属片と植物の種ですけど何か？」

お爺さんは俺が取り出したガラクタを陶醉しきった表情で  
「しとらんわ！！最近のガキはみんなこうか！！」

「まあ、俺のことはいいですよ。それより妹の《杖》はいつ頃できますか？」

「…まあ材料はそろってるし、せいぜい2日ぐらいで出来上がる。他に注文も無いしな。」

ただ、まだお嬢ちゃんは正式に注文したわけではないがな。」

「わかりました。どうするミリア？」

「あたしはお願いしたい。」

「じゃあそういうことで。」「わかった。ちなみに料金は…今回は初回だから後払いでかまわん。」

普段は前払いなんだ…

「じゃあ、俺はギルドに行くけどどうする？」

「あたしはもう少しここで商品眺めてるよ。」

「わかった、後で迎えに来るよ。」

そう言っただけ俺は外へ出た。

それにしても、アクセサリより武具に興味津々な妹って……お兄ちゃんは心配だ。

- - - - -

「……デッケー」

これが王都のギルドの第一印象

「こんなにデカイの建てる必要ないだろ…。」

「まあいいや中にはいる」

扉を開けたら女性職員が近づいてきた

「えっと、君学園の子よね？登録に来たの？」

「いえ、ギルドカードならすでに持ってます。ただ王都に来たのはじめてなのでクエストを確認しようかと」

「あら、そうなの？」

何か疑われてる？

「確認させてもらえる？」

「……それは義務ですか？」

「一応ね。でもそんなに警戒しなくても大丈夫よ。守秘義務があるから。」

必要以上に見せたくないんだけどな。

「わかりました。どうぞ」

俺はカードを職員に見せた。

「どれどれ？ - - !! ちょっとこれムグッ」

俺は慌てて職員の口を塞いだ

「守秘義務は!?!」

「プハッ、ご、ごめんなさい。」

うわ、手がベトベトだ。

「それにしても噂の『牙折り』に会えるとわね。」

「.....あんまりその名で呼ばないでくれませんか？」

そう言いながら俺は職員の服で手を拭った。

「タオル渡すからやめてちょうだい！」

職員がタオルを取りに行った

- - その時

ドン！

職員が学園の制服を着た知らない男の子とぶつかった。

そしてそのまま男の子は言い争いをしていた冒険者達にぶつか  
る瞬間にその内の一人が偶然振り上げた腕にぶつ飛ばされて側に居  
たソロの酔っ払い冒険者にぶつかって、そのままその場に崩れ落ち  
た。

……いや、何これ？

「だから何度も言つて、ん？ああ！君、大丈夫かい！！」

喧嘩をしていた冒険者達は男の子を介抱しだした。

職員は、いつの間にか居なくなつてやがる。

「おい！イテえだろうがガキ！！」

酔っ払いが俺に向かって叫んでいる。

いや俺！！？

「いや俺は関係ないでしょう！？」

「惚けてんじゃねえぞ！制服着てるじゃねえか！」

ちなみにさっきの男の子は冒険者に囲まれて、酔っ払いの死角にい  
る。



この酔っ払い…服装じゃなくて顔を覚えろよ

「このクソガキ！覚悟はできてんだろぅな！！」

「どうしてこうなった……。」

あれか？俺が職員の服で手を拭いたのがいけなかったのか？

「ちょっと落ち着いたらどうですか？」

「黙りやがれ！ぶっ殺す！！」

そう言っただけで酔っ払いは剣を抜いてきた……

「――抜いたな？」

その瞬間、俺は表情を消した。

side: サンドラ

そろそろカードもできたかしら？

「サラちゃん、そろそろ戻ろぅ。」

どうやらナズナちゃんもそう思ったようだ。

「そうね、行こう。」

『タオル渡すからやめてちょうだい!』

途中、下から何か聞こえたけど無視した。

「ああ君達、ちょうどカードができましたよ。」

2階に戻ったらさっきの男性職員がそう告げた。

「こちらがギルドカードになります。」

カードには名前とギルドレベル、そしてよくわからない項目の三つが書いてあった。

「カードについて説明致します。まずギルドレベルになりますが、こちらは受注可能なクエストの最大難易度になります。簡単にいえばこのレベル以下のクエストしか受けることができません。レベルを上げるにはある程度クエストをこなして頂くと、特別クエストが受注可能になり、それをクリアすればレベルアップになります。

また、レベルは低い方から1〜10となっておりませんが6以上になるには学園卒業が義務付けられています。

次にクラスの説明にまいります。クラスとは今現在使用している《杖》やその他武器によって呼ばれる名称のことです。

《杖》を変更した場合、クラスも変わりますのでご報告して下さい。ここまでに関か質問はございますか。」

「バナナはオヤツに入らず、それではまたのおこしを!」

職員はわたしのボケを無視して奥に引っ込んでいった。

「じゃ、帰ろっか。」

「そうだね。」

その時――

バギイイイイン

「何！？今の音！」

ナズナちゃんが狼狽える

「下からだわ！！」

わたしは急いで階段を駆け降りた。

一階では、尻餅をつきながら刀身が折れた剣を持った顔の赤い冒険者を

灰色の髪の少年が見下ろしていた。

あれは――

「ゼノ……?」

わたしは無意識にそう呟いていた。

## 9話 再会と…

「さて、それじゃあ説明してもらおうかが共！」

場所はオルデインの武具屋、その店主の目の前に男女二人が正座をしていた。

「いや、あのですね・・・」

サラがぎこちなく口を開いた。

先ほどギルドの酒場でひと騒動起こしたゼノは、

（やべっ！気まずい！）

そそくさとその場を後にした。もちろん階段付近にいるサラには気付いていない。

一方、サラはしばらく思考停止した後

（はっ！こうしてる場合じゃない！！）

我に返り、急いで後を追いかけた。

ついでにナズナは

（さっきの人は、今朝会ったミアアちゃんのお兄さん？……………って、サラちゃんがいつの間にかいない！！）



「月1のペースでぶっ壊しやがって。あれか？扉に怨みでもあるのか？それともワシに対する嫌がらせか？」

「いえ、そんな！滅相も御座いません！」

「それから、その若白髪」

「若白髪！？」

オルデインは今度はゼノに向き直って喋りだした。

「オマエがもつと遅めに歩いていたらうちの扉は無事だったんじゃないか？」

「ちょっと待ってください！！そんな無茶苦茶な！！・・・白じゃなくて灰色です！生まれつきの！！」

ブチッ！！

「そつちじゃつつつつつつ！！ねえええええだ！！ろおおおおおおがあああああアアアアア！！」

オルデインはキレた。

ちなみにその他二人はすみっこで震えていました。

（五分後）

「で？結局何でオマエはそのガキにタックルをブチカマしたんだ？」

「えっと、その五年ぶりだからつい…。」

「じゃあボウズ、オマエは何でお嬢ちゃんに背を向けてたんだ？」

「なんていうか……考え事をしていて気付きませんでした。」

オルディンはため息をついた。

「とりあえず、今日はもう閉店だ。後はテメエらでかってにしろ。」

そして一行は寮に戻って行った。

「……さてと、さっさと扉を直して《杖》を作んねえとな。」

.....

「じゃあ、あらためて自己紹介から。私はナズナ・イスルギ、よろしくね。」

「あたしはミリア・アルフレインです。よろしくお願いします。」



「……………」

「ほら、お兄ちゃんも自己紹介して。」

「いやその前に何で俺の部屋に集まってんだ？」

「だってお兄ちゃんは女子部屋に入れないでしょ？」

「それにロビーで話すのもちょっと……」

ここでサラが徐に口を開いた。

「あのさ、ゼノと二人で話したいんだけど……二人共いいかな？」

「わ、わかった。」

「それじゃ……」

ナズナとミリアは部屋を出た。

「……………聞いてもいい？」

「……………ああ。」

サラは深呼吸して、ゼノに問いかけた。

「あの時約束は……」「ごめん……………」

ゼノは質問を遮って喋りだした。

「結局、剣士にはなれなかった……」

「……そう。」

サラは静に立ち上がり、そのまま部屋を出ていった。

「ちょっとまってよサラちゃん」

ナズナが後を追いかけた。

「ゼノにい……」

「……仕方がないさ。あの時の約束を破った俺が悪い。」

「でも！」

「それにさ、正直どうやって接すればいいか解らないんだ……」

ミリアにはそれ以上何も言えなかった。

「サラちゃん！さっきのは酷すぎるよ！ずっと会いたかった相手な  
んでしょ？」

ナズナの問いに対してサラは

「…う…よう」

「え？」

「どうしよう！！話したいことがホントはイッパイあるのに！！ああでもいざとなると緊張して会話が続きませんし！」

「……えーっと、怒ってたんじゃ無いの？」

「そうじゃないの！！…まったくショックを受けなかったと言えは嘘になるけど…でも！」

サラは半狂乱になりながら喚いている

「さっきで嫌われて無いかな！ねえ！」

「…ドウドロウネ」

その後、ナズナがサラを落ち着かせるのに四時間かった。

## 9話 再会と…（後書き）

次回からようやく学園生活がスタートする予定です。

自分の文才の無さが怨めしい……

## 10話 二人の不安（前書き）

はじめに謝っておきます。

結局今回は、学園開始直前で終わります。

どうもすみません。

## 10話 二人の不安

Side:ゼノ

朝か……。

今日から学園生活が始まるのに気が重い。

「まあ仕方ないか……」

そう呟いてから部屋を見渡してみた。すると、

「あ、おはようございます……。」

知らない男の子が居た

「曲者……!!」

「ええっ!!」

とりあえず、叫んでみた。

「で、君はだれ？」

「いや、何で今叫んだの？」

「ムシャクシャしてやった。誰でもよかった。」  
「ごめん、意味が解らない。」

さて、ふざけるのはここまでにしとくか。

「それで君は？もしかしてルームメイト？」

「あ、うん。はじめまして、僕はマルク・マグリットといいます。」

「俺はゼノ・アルフレイン、よろしく。」

俺は先ほどから疑問に思っていることを聞いた。

「ところで、学園開始当日に入寮なんて珍しいね。」

「あー、実は昨日王都に着いてさ。そのままギルドに登録しに行ったらちよつと事故にあつて、深夜まで北地区の宿に寝かされてんだ。」

ん？それって……

「もしかして、職員とぶつかった後に冒険者に偶然殴られたりした？」

「……よくわかったね。」

そりゃあ

「現場にいたからね。」

昨日ギルドにいたあの子だったとは……笑うしかないな。

「……ま、まあこれからよろしく……」

「ああ、こちらこそ。」

「じゃあ僕はもう行くよ、また後で。」

マルクはそのまま学園に向かって行った。  
俺も準備するか……

- - - - -

一階に降りたら偶然サラとナズナに会った

「あ、……おはよう」

「おはよう、えっと、その……じゃあわたし急いであるから！」

そう言ってサラは行ってしまった。

「ちょっと！サラちゃん！……行っちゃった。」

俺はナズナに聞いてみた。

「やっぱりサラは怒ってる？」

「いや、違うんじゃないかな……」

もしかして気を使わせたかな？

「それより、早く行かないと！」



それもそうか……

俺達は学園に向かって歩き出した。

｝side out｝

ゼノとナズナはそのままなんとなく並んで歩いていた。

「あのさ、聞いていいかな？」

沈黙に耐えられずナズナが質問した。

「その、何で剣士になるのを諦めたの？」

サラのルームメイトであり親友でもあるナズナはじつは以前、ハン  
グ村時代のゼノの話をサラから聞いていた。というか何度も聞か  
されていた。

だからこそ疑問に思っていた。

（サラちゃんの話聞いた感じだと、簡単に諦めるような人じゃな  
いと思うんだけど……）

「……結論から言ったら才能がなかったからかな。」

「どう言うこと？」

「十歳のときに今の父さんに引き取られてすぐに剣術を習ったんだ」

「それで？」

「3日目の夕方に言われたよ、『オマエ驚くほど才能無いな！』  
って、しかも笑顔で。」

「でもそれだけで……」

「もちろん俺もそれだけじゃ諦めなかった。来る日も来る日も剣を振った。朝から晩まで振り続けた。

そして、父さんは来る日も来る日も『全然進歩しないな！』とか『ここまで見込み無いと逆に笑えるな！』とか言って爆笑し続けた。本人に悪気は無かったけどそのたびに母さんにぶっ飛ばされてた。」

「……………」

「1日も休まず剣を振り続けたから、その甲斐あって体力と筋力だけは順調についていったよ。そして、半年が経過した。

ある日、俺の訓練を見ていた妹が父さんに『あたしもゼノにいいといっしょにしゅぎょうしたい』と言った。」

「……………それから？」

ナズナは嫌な予感しかなかったがそれでも聞いた。

「10日で剣技を追い抜かされた。さすがにショックでそれ以来、剣術は諦めたよ。ちなみにミリアは当時8歳だったっけ。」

「……………軽々しく偉そうなこと言って本当にごめんなさい。」

（サラちゃん、ゼノくんは根気よく頑張ってたみたいだよ……………悲しいくらい。）

「まあ、昔のことだしもう吹っ切れたけどね。ただ、やっぱり約束を破ったのは心残りではあったよ。……………結局2つ共破ることになったけど。」

「2つ?」

「『剣士になる』と『会いにきて』、どちらもできなかったけどね。」

「それは再会出来たんだから約束は果たしたんじゃない……………」

「今思えばさ、もっと早く会いに行けたんだ。でも出来なかった」

「どうして?」

「恐かったんだ。約束を破ったことで拒絶されるんじゃないかって思うと。」

ゼノは苦笑しながらそう答えた。

（ゼノくんはどんな心境で自分のことを話してくれたんだろう?今まさに（本当は違うけど）サラちゃんから拒絶されてる状態なのに。）

結局それ以上、二人の会話は続かなかった。

- - - - -

side:サラ

はあ~~~~~.....

やってしまった。どうしても面と向かって話ことが出来ない

「はあ~~~~」

「おはようございます。」

振り返ってみるとミリアちゃんがいた。

「おはよう~~~~」

「少しお話してもいいですか？」

「うん、いいよ。」

「昔のお兄ちゃんについて話を聞きたくて」

「何でまた急に？」

「いえ、確認しておきたくて。」

よくわからないけど、何か考えがあるみたい。

「昔のゼノは……常に自分以外のことを考えて行動する子だったんだ。」

わたしは記憶を探る。

「ハング村では、その年に五歳になる村の子供達を集めて全員の適正属性を調べるんだけど……わたし達の年ではとても騒がれたわ。正確に言えばわたしとゼノの結果がね。」

当時五歳になったばかりだったっけ。

「わたしの適正属性は3つあった、これはハング村では異例のことだったの。」

対してゼノの場合、ハング村どころか歴史上でも異例中の異例だったわ。」

「それは知ってます。お兄ちゃんには何故か適正属性が存在しないんですよね。」

ゼノは誰よりも悪い結果だったのに……それでもわたしを本気で祝福してくれたっけ。

でも

「その日から周りの子供達はゼノのことを蔑んだわ。大人達はゼノに興味が無かったのか、それを注意する人はいなかった。」

今思い出しても腹がたつ。ゼノは何も悪いことなんてしてないのに。

「でもゼノは自分を馬鹿にされても何も言わなかった。そのかわり泣き言を言ったことも無かったわ、当時五歳の子供がよ。」

考えてみれば、ゼノが泣いているとこなんて見たことないや。

「そのくせ七歳になった頃、一人だけ基礎魔法が使えるようになった、そのせいでわたしが苛められたときは真剣に怒ってくれたの。」

自分の方が辛かったくせに

「・・・そんな感じだったわ。」

「だったら安心してください。」

ミリアちゃんは続けた

「お兄ちゃんは、ゼノにいは今も変わっていません。だから不安にならずにゼノにいと話あげて下さい。」

不安にならずに、か。

（少しがんばってみよう）

わたしはそう心の中で呟いた。

## 11話 波乱のクラス分け（前書き）

更新が遅れました。

今回は、2話あります。

## 11話 波乱のクラス分け

学園の校門前には次々に生徒が集まり、教師がそれを誘導していた。

「中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎に向かってください！」

学園の敷地の総面積は西地区の4割を占めていおり、敷地の中央付近に2つの校舎が並んでいる。校舎の高さはどちらも4階建てとなっている。

そして、その校舎を囲む様にさまざまな施設が敷地内にある。

「それから、入口で自分のクラスを確認してください！」

ついでに学園に通う生徒の人数について説明すると、まず中等部の1年生が200人、この200人が通称入学組と言われている。学園では1学年5クラスになっており、15歳未満の編入生は1クラス辺り5人、つまり25人ずつ2年生と3年生に加わることになる。よって中等部から進級するのは250人である。

そして、15歳以上の編入生は全員高等部の1年生として加わるのだが、高等部では毎年クラス辺り50人、つまり250人が編入するため、最終的に一学年500人になるのである。

学園では、入学組以外の300人のことを編入組と呼称しているのである。

そしてマルク・マグリットもその内の一人であった。



（はあく、王都に着いてすぐ気絶したり、ルームメイトはちょっと変な人だったり……ついてないな）

どうやら彼のゼノへの第一印象は「変な人」だったようだ。  
第一声がアレなので無理もないが。

「次の人、名前は？」

「マルク・マグリットです。」

「えっと、マルク…あつた、Dクラスへどうぞ。」

そのままマルクは教室へ向かった。

- - - - -

「繰り返します！中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎に向かってください！」

「それにしても、王都の人は何でも大きくすればいいと思ってるのかな？」

「いや、人が多いからだと思うよ」

ゼノとナズナは結局あれから会話も無く学園に到着した。

「いや、それでも大きすぎだって。学園は王立とか言ってるくせに

しつかり税金で運営されてるのに。」

ゼノは愚痴をこぼした。

「だいたい、お偉いさんは税金を無駄使いしすぎなんだよ！！子供手当てなんかすぐに廃止するべきだ！！」

「何の話！？」

「さあ？」

（……ゼノくんもサラちゃんみたいに突然ボケるんだ。）

ナズナの悩みの種が一つ増えた。

「次の人、名前は？」

「ゼノ・アルフレイン」

「ナズナ・イスルギです。」

「えーと、お約束とおり二人共Dクラスよ。」

（……また増えた）

ナズナの気苦労は続く

「クラスに着いたら担任の指示に従って席に着いてください。」

二人は教室に向かった。

一方、教室では。

「おやおや、『紅嵐』のルミールさんではないですか。」

サラは窓側の列の中程の席に座って、外を眺めていた。

「どうやら貴女もDクラスそうですね。」

（不安にならずに、昔みたいに……）

サラは耳に入ってくる雑音を無視して今後のことを考えていた。

「それにしても、高等部からこんな大勢の編入組なんかと同じクラスに居なくてはならないとは……生粋の入学組である僕達にはふさわしく無いとは思わないかね。」

「用件が無いなら話しかけないでくれないかしら、シムジウ・ハン  
グ」

サラはいい加減ウザくなったので、雑音の発生源をフルネームで拒絶した。

と、そこへ

「いた！よかった、サラちゃんも同じクラスだったんだ。」

ナズナが到着した。

「これで3年連続ね！」

と、二人が盛り上ったので

「ふん、編入組ごときが。」

シムジウはそう捨て台詞を吐いて席に戻っていった。

「何のアイツ！」

「気にしないでいいよ…。それより、ゼノくんも同じクラスだよ！」

それを聞いたサラは

「そうなんだ。（よし！）」

周りに見られないようにガッツポーズを決めた。

一方、そんなサラの気持ちに気付いていないゼノは

（どうやらサラも同じクラスみたいだな。）

「さてと、俺の席は……特に決まりもないし、廊下側の一番後ろでいいか。」

はからずもサラから遠くの席に座ろうとした。

その時――

「バカな！何故貴様がこの第一魔法学園にいるんだ！！」

偶然目があつたシムジウが叫んだ。

「その灰色の髪、貴様は落ちこぼれのアルフレインだな！！」

周りの生徒が突然喚き出したシムジウと、その矛先が向いているゼノに交互に視線を向ける。

「いくら編入組でも貴様のような無能が学園に入れるはずがない！さては何か卑怯な手段でも使ったな！」

と、どんどんヒートアップして行くシムジウに対してゼノは――

（いや、誰こいつ？）

まったく彼のことを覚えていなかった。

「てか、‘初対面’の相手にいつたい何なのあんた？」

考えてみたがまったく思い出せなかったのでゼノは質問することにしたようだ。

「貴様！まさかこの僕のことを覚えていないのか！？このハング村の村長の息子の僕のことを！」

そこまで言われてようやくゼノは思い出した。

「ああ！あの9歳までオネショしてた奴か！？」「な！？」

クラスの生徒達は爆笑した

「貴様ーーーーー！」

シムジウはゼノに殴りかかろうとした、そこへ

「はい！全員席に着きなさい！」

担任がやって来た。

「ほら、とつとと座って！」

『覚えていろ、この・・・能無しが！』

シムジウはゼノに向かって小声でそう吐き捨てた。

｝side：ナズナ｝

あ、危なかった！……先生の到着が少しでも遅かったら、きっとサラちゃんは彼に魔法を放ってた…。

『サラちゃん！落ち着いて！ゼノくんなら平気だから！』

『何なのアイツ！ゼノに何の恨みがあるってのよ！！』

『たしかに酷いけど今は堪えて！』

私だってさっきのは許せないけど……でも何でゼノくんは平然としてるんだろう？

## 12話 騒動（前書き）

2話目です。

短いですがどうぞ。



## 12話 騒動

第一魔法学園では、新学期の初日と次の日は授業をせずに、二日に渡って生徒の能力測定を行っている。

担任が来た後Dクラスは学園の施設の一つ、室内闘技場に移動していた。

「それじゃ、《杖》を持って男女に別れて各自測定を行ってちょうだい。」

そう告げると担任は男子の方にやって来た。

「あの、先生は女性ですよね？」

「もちろん！だから女子の着替えを観てても面白くないからこっちに覗きに来ちゃった」

「いや『来ちゃった』じゃないでしょう！しかも今日は着替えたりしませんからね！」

初日は制服のままで五感と魔力の測定が行われるだけである。

「何ですって！？　じゃあ先生のこの興奮はどうすればいいのよ！」  
「知りません！」

担任（32歳：彼氏無し）はこの後10分間も粘ってようやく諦めた。

- - - - -

「お疲れマルク。」

「……ありがとう」

ゼノは担任に10分もの間、たった一人で対応していたルームメイトを労った。

「そういえば、アルフ……」

「ああ、ゼノでいいよ。」

「じゃあゼノ、その……さっきのは何だったの？」

「教室のやつ？別に大したことじゃないよ。昔住んでいた村でちょっとね。」

ゼノは幼い頃のハング村での出来事をかいつまんで説明した。

「そこでその俺が学園に編入したのが納得いかなかったんだろう。」

「……って、ちょっと待って！ たったそれだけのことで何で……」

ゼノの話を聞いたマルクは村の理不尽な行いを聞いて狼狽えた。

その様子をみたゼノは優しい声でマルクに言い聞かせた。

「ありがとう。でも別にマルクが怒ることじゃないよ。 所詮昔のことだから。」

そのまま測定は進んで行き、残りが半分ぐらいになった時に「それは起こった。」

「それじゃあ、あとは自由解散ね！ 先生はこの後合コンに行かないといけないの！」

それだけ告げると担任は一瞬で闘技場をあとにして、ゲートに向かって走っていった。

（あの人よくクビにならないな。）

クラス全員の気持ちがこの時だけまとまった。

「邪魔者は消えた！ さっきの続きといこうかアルフレイン！」

空気の読めないシムジウが叫んだ。

「さっきの続き？ オマエが9歳まで「違うわ！」

「適正属性のない貴様が学園にいる何てありえない！ いったいどんな方法を使った！」

「普通に受験しただけだけど。」

実際は3回失敗したが、それは高等部から編入した生徒のほとんどに言えることである。

「惚けるな！ 貴様のようなクズが……」「いい加減にしなよ！」

叫んだのは先ほどから隣にいたマルクであった。

「さっきから聞いてみれば、全部キミの言いがかりじゃないか！  
ゼノに謝れよ！」

するとシムジウは矛先をマルクに変えた。

「何だ貴様！？ 編入組ごときが入学組の僕に命令する気が！」

「ああそうだよ！ だいたい入学組だから何だって言うんだ！ 人として言っていることと悪いことの区別も付かないのか！」

「……！！ 黙れこのクズが！！」「うわっ！」

シムジウはマルクを殴りつけた。

「編入組の分際で調子にのるからだ！」

その時……！

「おい、 てめえ今何した？」

静に、しかし凄まじい怒気をこめてゼノが口を開いた。

# 13話 決闘（前書き）

戦闘シーンが下手くそだと痛感した今日この頃……

### 13話 決闘

ゼノとシムジウは闘技場の真ん中で向かい合っていた。

「ふんっ、無能の癖にこの僕に楯突くとはね。」

「不愉快だ。ベラベラ喋るな。」

ゼノは今怒っていた。

自分の為にマルクが殴られたことが我慢出来なかったからだ。

「入学組と編入組の差を見せてやる！」

学園の一部の生徒の間では「入学組が編入組より優れている」という考えが流行っている。

これは受験を勝ち抜いた入学組に対して、編入組は少くとも一回は受験に落ちているからである。

「入学組と編入組の差？ 結局たった三年間で縮まるぐらい大したこと無いものだったな。」

――だがゼノはそれを一刀両断した。

「貴様に思い知らせてやろう！この僕の――」

「前置きは要らない。先生の誰かが来る前にさっさと終わらすぞ。」

シムジウは自分の《杖》であるロングソードを構えた。 対してゼ

ノは棒立ちのままだった。

「貴様！《杖》ぐらい構えたらどうなんだ！」

「生憎だが俺は《杖》を持ってないんでな、そもそも基礎魔法を使うのに《杖》は必要ない。」

「ふん、落ちこぼれが、行くぞ！『ファイアボール』！」

シムジウのロングソードの切っ先から火球が飛び出した。

ゼノはそれをサイドステップでギリギリ避けた。

火球はそのまま闘技場の壁に当たり、当たった箇所が熱で溶けていた。

「精々逃げ回ることだな！『エアブレード』！」

今回は、《杖》を横に振るい風の刃を一度に二つ飛ばしてきた。

一つ目はやはりサイドステップでギリギリ避けるゼノ、しかし避けた先に更に二つ目の刃が飛んできた。

「おっと」

ゼノは身体を仰け反らして何とかこれも避けた。しかし、シムジウは既に火球を放っていた。

「水よ！」

ゼノは基礎魔法である大気中の水分を集める『水汲み』を使って、火球に水をかけたが、火球は一瞬スピードが遅くなるだけだった。しかし、おかげでゼノは体制を立て直して火球をかわした。

「はっ！ どうだ、これが僕の魔法だ。どうした！避けるだけで精一杯か？」

シムジウは余裕な態度で魔法を放っていた。

｝side：ナズナ

危ない！

さつきからゼノくんはほとんど魔法を使って無い、使ったとしても何の変哲もない基礎魔法だけで、しかもほとんど効果が無いみたい。

「サラちゃん！このままじゃゼノくんが！」

ゼノくんは飛んできたエアブレードをまたギリギリでかわした。

あのエアブレードは闘技場の石壁を軽々切り裂くぐらいの切れ味なのに。

「ねえ、サラちゃん！」

「すごい、まさかこれほど……」

「サラちゃん？」

何だろう？ハングくんの魔法の威力なら中等部にいた同学年の子達なら知ってるはず？

現にこの場でもその威力に驚いているのは今年編入してきた子だけなのに。

「確かにハングくんの魔法はすごい威力だけど、今は感心してる場合じゃ……」

「違うわ！」



違う？

「すごいのはゼノの方よ！」

「どういうこと？」

｝side out｝

「そろそろ解っただろう無能！　これが才能のある者となない者の差だ！」

得意気にシムジウは言い放つ  
しかし――

「いや解んねえな。」

ゼノは呆れたような口調でそう言った。

「確かに俺には魔法の才能も剣術の才能も無かったけど、  
そんなに才能ないぞ。」                      お前も

「何だと？」

「攻撃力はそれなりにあるが……所詮それだけだ。」  
「それは負け惜しみのつもりか！」

「宣言してやるよ。」  
ゼノは冷めた口調で告げた。

「基礎魔法さえ使えばお前の魔法は誰にでも防げる。」

「ほざくな！ 『ファイアボール』！」

「まず一つ目の『火球』だが、熱量を高めることを意識しすぎたせいで炎が拡散している」

ゼノは右手を前に突き出して、樹の基礎魔法の『そよ風』を発動した。

「だから空気抵抗が強くなりスピードも出なければ、進行方向に対して斜めに風を当てるだけで逸らせる。」

宣言どおり火球は左方向に逸れていった。

「しかもその技、剣の切っ先からしか出ないみたいだから予測もしやすいしね。」

「バカな！？無能ごときが！ 食らえ！ 『エアブレード』！」  
「次にその『風刃』だが……」

ゼノはゆっくりと歩み寄りながら続けた。

「切れ味とスピードを特化させたせいで軽すぎる。 これも『そよ風』で簡単に逸らせる。更に……」

今度は地の基礎魔法の『石造り』で足下の土を石にして蹴り上げて風刃を迎撃した。

「刃の横腹はとても脆い」

シムジウは目の前の光景が信じられなかった。

「う、嘘だ！こんな……さっきまでかわすのがやっとだったやつが！」

「ハハハ…あの程度の攻撃をか？」

というより気付いてなかったみたいだな。俺が必要最低限の動きしかしてなかったのを」

ゼノは先ほどの攻撃をわざと、全て紙一重で回避していた。

「で？その自慢の才能とやらはもう打ち止めかな？」

「黙れ、クソっ！！」「炎よ！集いて我が敵を焼き尽くすせバーンフレイム！！」

シムジウは中級魔法の『炎球』を放った。

「それも基礎魔法だけでいけるよ……」

ゼノはポケットから金属片と植物の種を取り出した

「『地よ』そして『水よ』」

『石造り』で空洞の石の玉を作りその中に金属片と水をいれた

「『雷よ』そして『樹よ』」

今度は金属片に『帯電』を使い、中の水を電気分解して、植物の種

を『発芽』させて蓋をした。

「最後に『火よ』、食らえ！」

そして植物の芽に『着火』をかけると同時にソレを迫り来る『炎球』にぶん投げた。

「そんな物で僕の『バーンフレイム』を防ぐつもりか！」

「もちろんだ。こいつは俺が考えた唯一の攻撃魔法だ」

そしてソレは『炎球』に呑み込まれ、そして爆発を起こしてた

「名前は……とりあえず『水素爆弾』とでも言っておくかな。」

そして爆発が起きたことで『炎球』の軌道がずれた。

「そ、そんな！　こんなの何かの間違いだ！」

「ちなみに今の魔法は発動に時間がかかり過ぎだ。」

そしてゼノは遂にシムジウに近くにたどり着いた。

「で、これで終りか？」

「あ、あ……　うわあああ！」

シムジウは錯乱しながらロングソードを振り下ろした。

「邪魔だ！」

ゼノはそう言うロングソードを素手で、殴り碎いた、

「そのまま寝てろ!!」

そしてそのままシムジウを殴り飛ばして勝負が決まった。

## 14話 約束の行方

「君達、何か言い訳はありますか？」

高等部校舎の生徒指導室でEクラスの担任のゲイリーは目の前で正座している二人に問いただした。

「じゃあ先ずは…… 貴女は自分の仕事をサボって何してたんですか？」

問いかけられたDクラスの担任のマオ・フェイは視線を右往左往させながら答えた。

「違うのよ！絶対に外せない用事があったのよ！」

「あんた合コンに行っただけだろうが！」

ゲイリーはシャウトした。

「それから、新入生の君は何故決闘なんてしたんですか？」

問いかけられたゼノは

「黙秘します。」

黙秘権を行使した。

「……成績に響き、言い争いからヒートアップしました。」  
黙秘権撤回

ゼノは包み隠さず話した。

「事情はわかりました。　しかしやり過ぎだとは思わなかったんですか。」

「でも、最終的には一発殴っただけじゃないですか。」  
ゼノは反論したが、

「その前に彼の《杖》を壊したでしょう。それに君のその一発のせいで彼は医務室送りだよ。」

ゼノに殴り飛ばされて気絶したシムジウは現在医務室で治療術をうけている。

「何よりあんな大勢の前で彼の魔法の欠点を暴露したのがよくない」  
ゲイリーは咎めるような口調で言った

「下手したら彼は立ち直れなくなる。」

しかし――

「それがどうかしましたか？」

もっと大きな挫折を経験し続けたゼノにとって魔法の欠点を暴露される程度、何でも無いことだったため疑問にしかならなかった。

「いいですか？　今後彼の魔法はアナタが実演した方法で無効化されてしまう、そうしたら――」

「じゃあ魔法を改良すればいい話じゃないですか。」

「はあ……。どうやらこのまま話していても無意味のようですね。  
……仕方ない、今日はもう帰ってけっこうです。」

「わかりました。失礼します。」

「アンタ（フェイ先生）は残ってください！」

- - - - -

ようやく指導室から解放されたゼノ

外は既に夕方になっておりゲートまでの道を紅く染め上げていた。

「やり過ぎ……か。」

ゼノは誰にともなく呟いた。

そこへ

「ゼノ！ごめん、僕のせいで」

顔を見るなり謝ってくるルームメイトがやって来た。

「マルクの方こそ俺のせいで殴られたのに何で謝るんだ？」  
「でも僕が殴られたからゼノが怒ってくれたんだろ？だからごめん……  
それとありがとう」

マルクは謝罪とお礼を照れくさそうにゼノに送った。

「……なあマルク」

「何だい？」

「……俺はやり過ぎだったか？」

ゼノは先ほどからゲイリーに言われたことが気になっていた。

「……何とも言えないかな。確かにやり過ぎな部分もある、彼は  
シムシウ



プライドも《杖》も粉々に砕かれてもしかしたらもう立ち上がれないかもしれないし……」

(……結局俺は『牙折り』のままなのか?)

「でも、それでも僕はキミに感謝しているよ。だからもう一度言うよ、ありがとう。」

「そっか……」

(少しは変れたんだろうか?)

二人はそのまま寮に向かって歩き続けた。

- - - - -

二人が『火の学生寮』に着く頃には日は完全に沈み暗くなっていた。

「なんか…… やたらと視線を感じたんだが。」

「既に噂になってるみたいだね。」

道中にいる学生達は二人に視線を向けてヒソヒソ話し合っている

「まあ、学園開始の初日から決闘なんてしたからしょうがないか。」

ゼノが寮のロビーに着くと見覚えのある夕焼けよりも紅い髪の少女

がまっすぐに目を向けていた。

「じゃあ僕は先に部屋に戻ってるよ。」  
マルクは気を効かせてその場を離れた。

「ねえ、ゼノ」

サラは何かを決心した様子で話しかけた。

「よかつたら少し付き合ってくれる？」

寮の外に出た二人は人の歩みが少なくなった大通りを並んで歩いていた。

「それで、何の用？」  
ゼノが聞くと

「そのさ…… ま、まだちゃんと会話をしてないなーって思ったから」

「そっか…そうだね。昔はもっとたくさん会話してたもんね」

「それでさ、聞きたいんだけど… ゼノは剣術を諦めた後どうして

たの？ ほら、さつき闘技場で剣を素手で碎いてたから気になつたさ。」

「その後、さすがにショックで二週間程落ち込んでたら、父さんに…… あつ、伯父さんのことね。」

ゼノは昔を思い出しながら話し始めた

「父さんに、『何時まで落ち込んでるつもりだ馬鹿野郎！』って怒鳴られてさ、その後に『お前は不器用だから道具を扱うのに向いていない、だからオレがケンカの仕方を教えてやる！』って言われたんだ。」

「何かメチャクチャな人だね。」

「ホントにね。それからいろんな人に鍛えられ続けてたらある日、父さんの知り合いに『よかったら俺が徒手格闘術を教えてやる』って言うてくれたから始めてみたんだ。」

「じゃあやつぱりゼノはあの時の約束を守ってくれたんだ。」  
話を聞き終えたサラがそう呟いた。

「え？でも俺は剣術を諦め……」  
「わたし達が約束したのは『剣術家』じゃなくて、『けんし』でしょ、だったら『拳士』でもいいじゃない？」

「でも『会いに来て』の方は……」  
「さつきわたしがロビーで待ってたら会いに来てくれた！」サラは間髪入れずに言いきった

「……ヘリクツじゃないかそれ？」

「だからどうしたの？」

あなたは約束を守ってくれたわ！

わたしが断言してあげる！」

そう言ってサラは微笑んだ。

「……ぷっ、ははははは……」

ゼノもつられて笑った。

こうして二人が交わした約束は五年間の時を経てはたされた。

## 14話 約束の行方（後書き）

次回からは更新ペースが遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします。

## 15話 クエスト準備

新学期開始から4日が経過した。

ほとんどの高等部一年生にとって初めての冒険者ギルドへのクエストを翌日に控えたこの日、1・Dではペア決めが行われていた。

「それじゃあ、適当に好きな人とペアを作ってちょうだい。」

と担任のマオ・フェイ先生、現在32歳ペア無し（独身）が指示を出した。

「なんかバカにされたような……」

side:サラ

ペア決めか、やっぱりここは無難にナズナちゃんと組もうかしら――

「ねえサラちゃん、ゼノくんとは組まないの？」

と思つてたらくんでもないこと言ってきたこの子――！

「ちよつ……そんないきなり……」

「でもチャンスじゃない！ この前やつと顔を見て話せるようになつたんだから！」

そ、そんなこと言つたつて……でも確かにこれはチャンスかも……  
……？

「わ、わかったわ……」

わたしは深呼吸をして――

「ゼーなあマルク！ペア組まないか？」……あれ？」

……どうやらゼノは近くの席にいたこの間の男の子とペアを組んだみたい……

「……ナズナちゃん……ペアお願い……」

「……ごめん……私のせいで……」

（side out）

40分後

「それじゃあ、みなさんペアは決まったわね！」

ちなみにこの第一魔法学園高等部は1学年500人で5クラス、つまり1クラスあたり100人もいるため、こういう時は非常に時間がかかるのである。

「じゃあ、ペア同士で明日と明後日に受注するクエストを話し合っ  
といてちょうだい。」

と言って教室を出ていこうとしたマオ、しかし途中で立ち止まり――  
「言い忘れたけど2日間で最低5つクエストをクリアしないと補習だから頑張ってね」

――爆弾を投下して去って行った。

「「「「ざっけんなー！ー！！？」」「」」」

クラスの大半の生徒がシャウトした。

side:ゼノ

オイオイ…… 随分とまあ無茶苦茶言っな。

「2日でクエスト5個で……」

「やっぱりゼノでも難しいの？」  
とマルクが聞いてきた。

「誰でも難しいと思うぞ……まず時間が足りないし……」

しかもほとんどの生徒が今回始めてクエストを受けるはず……

「まあいいや、それよりこれからギルドに行こうか。」

「え？一年生は明日からじゃないと受注出来ないんじゃないかなかった？」

「確認するだけさ、何を受けるか実際に見ておくほうがいいと思う。」

「なるほど……一理あるか。」



けど、その前に――

「おーい、サラ！」

「……えっ？」

何か惚けてなかったか？

「これからギルドに寄ろうかと思うんだけど……一緒にどうだ？」

「！？……行く！もちろん行く！」

「お、おお……そんじゃあ、イスルギさんも誘って4人で行くか。」  
それに気になることも有るしな……

＼side out＼

「じゃあ、さっそく行こう。」

「ちよつと待つて。」

とナズナが止めた。

「どうかした？ イスルギさん。」

「ナズナでいいよ。」

「じゃあナズナ」

「（いきなり呼び捨て……）その、わざわざギルドまで行かなくても学園の敷地内に学生用の出張所があるからクエストの確認はそこで出来るよ。」

「え、マジで？」

ということで行は学内にあるギルド出張所へ向かった。

「で？見た感じどうなの？」

クエストのリストに一通り目を通したのでサラがゼノに訪ねてきた

「そうだな…… まず確認しとくけど、今回の課題はペアでクエス

ト、5個、だよな？」「ええ、たしかそうよ。それがどうかした？」

と、そこでゼノ少し考えた後に一同に告げた。

「よし！そんなじゃ明日は4人でクエストを受けよう！」

「「「はい！？」」「」」

## 16話 クエスト前に

週末の二連休の一日目早朝、ゼノ達4人はさっそく寮のロビーに集まっていた。

「ねえゼノ……何もこんな時間に集まなくても……ふあゝ」  
とサラが欠伸をしながら訪ねた

現在日の出前、外はまだ薄暗い  
しかし――

「昨日確認したところ採取クエストの種類が少なかったんだ。」  
とゼノは告げた。

「えっと、どういうこと？」

「つまり取り合いになるってこと」

「取り合い？ でも採取クエストは常時受注可能の筈だけど？」  
今度はマルクが訪ねた

「確かにクエスト自体に制限はない……けど採取対象には数に限りがあるからね。」

「そつか学年で250組もペアがいるからすぐに無くなっちゃうのか！」

「さらに今回の課題に『複数のペアが協力してはいけない』なんてルールは無いから4人でこなせば少し楽になるってわけ。」

「そっか！それなら時間を短縮できるもんね！」

「でも何で採取にこだわるんですか？」  
ナズナが問いかける

「今回の課題はクエスト‘5種類’ではなく‘5個’、つまり同じクエストでも可能、ここまではいいよね？」

ナズナは頷いた

「そうなると採取だったら一回でノルマの二倍以上取れたらクエストを2個達成したことになるんだ。」

「あれ？でも結局2チーム分採取しなくちゃいけないならメリットは少ないんじゃない？」

「いや、実はそうでも無いんだ。例えば二人で採取に行った場合、一人が限界まで採取するともう一人だけで魔物の対処をしなくちゃならないから大変なんだ。でも四人いれば先頭と最後尾で一人ずつ対処が出来るから魔物と遭遇した時もやりやすくなる。しかも運ぶ人も二人に増えるから袋に入れたりしてより多く運べるしね。」

「なるほど、確かに集めすぎると持ち運びが難しくなるもんね。」

「でも一番の理由は、さっき言ったように後半になると採取は難しくなる、だから何れ討伐クエストを受けないといけないことになるんだ…その時四人いたほうがやり易いってところかな。」

「…へえ…。」

ゼノの説明を聞いた三人は関心しながら声をもらした。

……今の長つたらしい説明を読み飛ばした読者は何人いるやら……

## 閑話休題

（本当は他のペアの盗難防止の目的も有るけど、初クエストで不安にさせすぎるのも良くないか……）  
ゼノは声に出さずそう思った。

- - - - -

4人は日の出前に学内ギルド出張所（めんどいから次から学内支部で）へ到着した。

支部内にはやはりほとんど人がいなかった。

が、一人の男が一行を確認した途端に走り寄ってきた。

「えっ、誰あの人？」

「……？ あれはまさか！？」

例によってゼノだけは心当たりがあつた。

「おい！もしかしてオマエ『牙』か！？」

近づいて来るなりバスターソードを背負った男がそう叫んだ。

「はあく、やっぱお前かよ『角』。」

ゼノはため息混じりにそう答えた

おいてけぼりの三人はポカンとしていた。

「ねえゼノ、この人知り合い？」

三人を代表してサラが疑問を投げ掛けた。

「おっ！もしかしてその子が例のムグツ……」

「余計なことは言わんでいい……それより、何か用かロラン？」

「ロラン？ それって二年生の『剣角』のロラン先輩！？」

と二人のやり取りを聞いていたナズナが呟いた。

「『剣角』？ それって学年上位の実力者って噂の？」

「プハッ！……そういう君は期待の新人の『紅嵐』のサンドラだろ？」

「コウラン？何だソレ？」

とゼノが訪ねた

「サラちゃんの二つ名のことよ。」

ナズナが答えた

「水、樹、雷の三つの属性と紅い髪の毛からそう呼ばれてるのよ。」

「なるほど、同時に雨、風、雷が飛んでくるから嵐か。」

ゼノは納得したように頷いた

「で、話を戻すけどお前は何しに来たんだ罗兰」

「ひでー物言いだなあ、せっかくの一年ぶりの再会なのによ。て  
か一応オレは先輩なのにタメ口かよ。」

「今更お前に敬語は使いたくない。」

「なあぜノ、罗兰先輩とはどういう知り合いなんだ？」

「私も聞きたい。」

マルクとナズナの質問に答えたのは罗兰だった

「オレとコイツ（ゼノ）とあともう一人で去年までパーティ組んで  
たんだ。」

「つつても一年間だけな。」

約一年前に罗兰ともう一人が学園に編入したため解散したそうだ。

「で、いい加減何でこんなところにいたのか教えるよ。ここのクエス  
トはレベル2までしかないから本来お前がわざわざ、しかもこんな  
時間に来ているのはおかしい。」

「オマエに忠告しておくためだ。」

「忠告？」

「オマエが新学期早々やらかしたせいで・・・」

「周りに目をつけられた・・・か？」

「それもあるが『爪』の奴が探してる……せいぜい気をつけろ。」  
罗兰は忠告した

「あの規則馬鹿がか？」「ああ、何せ無許可の決闘だったからな。  
ただ『爪』よりもアイツのほうが御冠だったけどな。」

「ヤレヤレだ……………」

「ねえゼノ、さっきから角とか爪とかって何の話なの？」  
サラが疑問を投げ掛けた

「俺達がパーティを組んでた時の呼び名だよ。」

「オレが『剣角』だから角、もう一人が『雷爪』だから爪だ。」

「じゃあ、ゼノは何で牙なの？」

「それは……………」

「？」

ゼノがどもったのでロランが後を引き継いだ

「元々『牙折り』と呼ばれてたから牙にしたんだよ。」

「牙折り？何なのそれ？」

「ああそりゃあ……」

「ロラン……！」

ゼノがロランに怒鳴った

「わ、わりい……………」

「……いや、こっちも怒鳴って悪かった。」

「すまないがサラ、その話はまた何れ……………」

「わ、わかった……………」

「じゃあ、悪いけどそろそろ行くわ。」



「おう、引き留めて悪かったな。」

そう言つとロランは出口の方へ向かつて行つた。

「……その、ごめんねゼノ」

「いや、此方こそ……ただ『牙折り』はとつくに捨てた名前だから……」

それから一行はとくに会話もなくクエストを受注しに受付に向かった。

## 17話 クエスト開始

「ところで、今のうちに全員のギルドクラスを確認しとかないか？」  
クエストを受注し終わり、王都の西側に広がる草原を歩きながらゼノが唐突に提案した。

「確かに確認しておいて損はないかもね。」  
と言ってサラがギルドカードを差し出した

「どれどれ……『ウィザード』か、『杖』はその長杖だね。ナズナとマルクは？」

「私も『ウィザード』よ。『杖』は短杖」

「僕は『シューター』だよ。『杖』はこれだよ。」

そう言っでマルクは懐から自分の『杖』を取り出した。

「何これ？」

「もしかして銃か？」

それは一丁の拳銃だった。

「その通り。僕は魔力の総量が少ないから、遠距離の魔法限定だけど魔力消費が少ない銃は打ってつけてわけ。」

実はマルクの魔力総量は平均の7割程度しかない、そのため中等部に入れなかった。

「でも魔力の量なら修行しだいで増やせるぞ。」

「それでも一般に知られている修行法なら試してみたんだけどね。」  
魔力は適正属性と違い増やすことは可能だが、普通は爆発的に増える物では無いのだ

「かわりに『熱感知』の魔法みたいに消費魔力の少ない熱魔法は得意だから索敵は任せてくれ。」

「ところでゼノくんのクラスは何なの？」

「ああ、まだ見せてなかったね。ホラ」

ゼノはギルドカードを三人に見せた。

そこにはこう書かれていた

- - - - -

名前：ゼノ・アルフレイン

ギルドクラス：ビースト

レベル：4

- - - - -

「何これ？」

「ビースト？」

「えっと、ゼノくんの《杖》はその短剣じゃないんですか？」

ナズナはゼノが腰に携えているナイフを指差しながら聞いてみた。ちなみにナイフなどの短剣を《杖》として使用する冒険者のクラスは本来なら『レンジャー』と呼ばれるのである。

「いやコレはただのサバイバル道具だよ。必需品ではあるけどね。」

ビーストってのは特殊クラスの一つなんだ。」

特殊クラスとは、使用する《杖》がギルドが定めたクラスの対象外である冒険者に与えられるギルドクラスのことである。

余談だがこれがあるせいで今までゼノのカードを見たギルド関係者や冒険者に詳しい者達には彼が『牙折り』の二つ名であつたことがバレていたのである。

「俺は《杖》を使わずに素手で戦うからクラスが『獣』になつたらしい。」

「ちょっと待って！今とんでもないことを言わなかった!？」

「素手って言ったように聞こえたんだけど！」

マルクとナズナは驚いたがサラは冷静に疑問を口にした。

「ねえ、ゼノが徒手格闘を使うのはこの前聞いたけど何で籠手を使わないの？」

「それは俺には必要ないからだよ。正確には使つと逆効果になるんだ。」

「どういうこと？」

「まあ、何れ解るよ。」

そう言つてゼノははぐらかした。

「それより、そろそろ森に着くぞ。」

一行はいつの間にか王都の西に4kmの地点にある名も無い森の入口に着いていた。

「とりあえずクエストを確認しよう。」

「……まあいいわ。わたし達は『薬草を5束採取』と『大猪を1

頭討伐』よ。」

「僕達は『水茸を5本採取』と同じく『大猪を1頭討伐』だね。」

「でもゼノくん、何で大猪の討伐を受注したんですか？採取だけでも時間がかかるのに。」

ゼノは受付でクエストを受注する直前に当初の予定に無かった討伐クエストを追加していたのだ。

「それは水茸は大猪が好んでよく食べるからだよ。だから採取に時間をかけていたらほぼ確実に現れるからついでにね。」

つまり、どうせ戦うことになるから殺っちまおうぜ　ということである。

「とりあえずノルマは薬草10束と水茸10本でそれ以上は余裕があればその時に、って感じで行こう。」

「『了解！』」

この時三人は気付いてなかった。

ギルドクラス以外にギルドカードに記載されたゼノの異常性に……

- - - - -

「あつた！これでコッチのノルマはとりあえず達成したわよ。」

「了解！ 俺達の方もこれでノルマ達成だ。」

森に入って5時間が経過した。既に太陽はほぼ真上から大地を照らしていた。

「マルク、辺りに魔物はあるか？」

「とりあえず近くにはいないみたい。」

「わかった。じゃあ皆、一旦休憩にしよう。」

「了解、じゃあナズナさんお願いします」

「任せてマルクくん。『大地よ』」

ナズナの魔法によって地面が盛り上り、石で出来たカマクラが完成した。

「すごいな、同じ基礎魔法の『石造り』なのに俺のとは比べ物にならない……」

とゼノが感嘆の声を漏らした

「それでも一応地属性だから……」

ナズナは照れながらそう返した。

「さて、そろそろ他の生徒も増える頃だと思っただけ……」

一行がクエストを開始してからまだほとんど他の生徒を見かけていなかった。それでゼノが不思議そうに呟いた。

「あのねえ、初めてのクエストでこんな森の奥深くまで探索する生徒なんかいないわよ。」

「えっ？」

「ゼノくんは慣れているみたいだけど……」

「正直僕達もゼノの言うとおり4人で行動してなかったらとてもじゃないけど……」

数年間のクエスト経験のあるゼノと違い、今回が初クエストの3人にとっては十分にハイペースであった。

「ごめん、気づかなかった……」

「気にしないの！ホラ、ゼノのお蔭で既にクエスト二つはクリアしたも同然なんだから！」

「そうよ！それにゼノくんがいなかったら今回の課題はクリア出来ないだろうし。」

サラとナズナはそう言ったがゼノは浮かない顔をしていた。

その時――

「これは！？」

「どうしたマルク？」

「大きめの熱源が2つ近づいて来た！距離は200メートル！」

「来たか！」

「よし！行きましよ！」

勢いよく飛び出したゼノとサラ  
対してナズナとマルクは

「ちょ、ちよつと怖いかも…」

「実は僕も…」

カマクラから飛び出した一堂、そこで――

「なっ！？熱源が増えた！」

「方向と数は？」

「数は一頭だけど方向はさっきの二頭の反対側から近づいて来てる  
！」

それを聞いたゼノは少し考えた後

「じゃあ、俺が二頭引き受けるから3人は残りの一頭を頼む。」

「なっ！！ちよつとゼノ、本気で言ってるの！？」

「大丈夫だ。大猪はクローゼ村にいた頃に何度も狩った獲物だから。  
」

狼狽えるサラに対してゼノは平然と言い放った。

「対処法はさっき教えたよね。たぶん大丈夫だと思うけど何かあったら直ぐに呼んでくれ。」

それに一回は戦闘を経験しておいた方が今後のためになると思うから頑張れ。」



そう言つてゼノは二頭がいる方向に走つていった。

「…ゼノくんの心配をしてたのに」

「逆に心配されるとはね…」

ナズナとサラは苦笑いするしかなかった

ガサッ

「来るよ!」

「は、はい!」

「戦闘開始ね!」

三人は《杖》を取り出し身構えた。

## 18話 討伐

サラ達三人が身構えると同時に正面から全長2、3メートルの猪が飛び出してきた。

「ナズナちゃんお願い！」

「うん！『捕らえる土の腕、アースハンド』」

ナズナは地の初級魔法を発動した

大猪の真横の地面から、土で構成された巨大な腕が大猪を捕らえようと伸びる

「フギイイイ！！」

大猪は鳴き声をあげると同時に真横に方向して迫り来る土の腕に突撃して蹴散らした

「よし！ナズナちゃんは下がって、作戦通りをお願いします！」

「わかった！」

「次は僕達の番だね！」

ナズナと入れ替わってサラとマルクが前に出た

「マルク君、時間稼ぎよろしく！」

そう言っただけサラは雷の魔力を練り上げ始めた。

「わかった！『アクアバレット』」

マルクは『水弾』を大猪の横目掛けて撃ち込んだ

「フギイ！！」

大猪は攻撃をまともに食らったが、一鳴きするだけでほとんどダメージを受けていないようだった

そして大猪はマルクの方に向き直って突進してきた

「くらえ！『ミストストリーム』」

マルクは正面から突撃してくる大猪に『濃霧』を放った。

大猪は霧が飛んでくるとさらに加速して真っ直ぐに突っ込んだ  
大猪の注意が霧に向いている隙にマルクは横飛びで進路上から逃れた

（ゼノの言った通りだ。）

マルクは森に入って直ぐにゼノに言われたことを思い出していた

~~~~~

「そういえば、皆狩りの経験はあるの？」

「今更それを聞くの？……わたしは無いわ。」

「僕も」

「私も」

「じゃあ、大猪と戦う時の注意点を教えておくよ。」

ゼノが言うに、注意点は三つ

一つ、大猪は自分の頭と牙の硬度に自信を持っている、そのため自分に向かつて飛び込んで来る物には必ず正面からぶつかってくる

二つ、攻撃方法は突進のみ

三つ、大猪は腹部が柔らかいためそこを狙え

「あとは基本的な事だけど森の中では必中の時以外は火を使わないこと、火事になったら大変だしね。」

~~~~~

「ていうか、ただでさえ僕は攻撃力が低いのに火属性を使えないのが辛い！」

愚痴りながらも上手く間合いをとって『水弾』を大猪の全身にまんべんなく撃ち込むマルク

しかし、大猪はそれを意に介さずに真っ直ぐに突っ込んでくる。

「やらせません！『ストーンシルド』」

それを阻むためにナズナが地属性の基礎魔法『石盾』を発動したこれは『石造り』の魔法よりも発動が速く丈夫な防御魔法だ

『石盾』に大猪が凄まじい音をたてて衝突した

衝突によって大猪の突進は止まったが、盾に大きな亀裂がいくつも走った

しかしその一瞬の隙をサラは見逃さなかった

「とどめよ!」降り注げ、天空の怒り! サンダーボルト!」

サラは練り上げた雷の魔力を開放して中級魔法の『落雷』を発動した

瞬間、轟音と共に目が眩む様な雷が大猪の脳天を貫いた

そして――

ズーン!!

大猪が横向きに倒れた

大猪は感電してピクピク動くのがやっとのようだ

「ふー、作戦成功ね。」

サラが汗を拭いながらそう言った

作戦とは実にシンプルで

マルクが敵の注意を引き付けながら水弾で相手を濡らして

ナズナが防御魔法で相手の攻撃を一瞬でも止めて

サラが渾身の雷魔法を叩き込む

それだけである

「僕だけあんまり役に立てなかった気がする……」

「そんなことないです！マルクくんが注意を引き付けてくれたお蔭です！」

落ち込むマルクとそれを慰めるナズナ

そこへ――

「そうそう、それにマルクが相手を水浸しにしたおかげでサラも雷を精度を気にせず射てたんだし。」

「そうよ、わたしの『サンダーボルト』は命中率がわる……」

「ん？どうした？」

「……」

いつの間にか当然のように会話に参加していた灰色頭に三人は啞然としていた。

「まあ、まだまだ無駄な動きもあったけど初めてにしては上出来だ！」

「……あ……え？」

「な……な……な……！」

「ちょ、ちよつと何でゼノがここにいるの!？」  
それぞれ驚きの声をあげる三人

「ん? いや、速攻で終わらせただけから様子を見に来ただ。具体的にはマルクが回想シーンに突入してる途中から。」

「いや、何の話!？」

すかさずツツコミを入れるマルク

「あのそれで大猪は? 二頭いたはずでは？」

「ああ、そこに有るけど」

ゼノが指差した方向を見るとそこには背骨が変な方向に折れ曲がって絶命している二頭の大猪が転がっていた

「うそ……」

「わたし達はあんなに苦労してやっと一頭倒しただけなのに……」

「……どうやって倒したんだ？」

「突進をギリギリで回避して背中全力で手刀を叩き込んだ。それより、さっさとコイツの牙を採取しよう。」

「あ、うん……」

討伐クエストでは倒した相手の指定部分をギルドに提出することで達成となる。

……ベタだっけ? 別に良いじゃない、人間だもの

「採取が終わったら飯にしよう。」

「……そうね。言われてみれば朝から何も食べてなかったわ」

「ちょうど肉も手に入ったことだし」

「「えっ!!?」「」」

先ほどより驚愕する三人であった。

（二十分後）

「よし、焼けたぞ。」

「「「……」「」」」

「どうした？食わないのか？」

俯いて黙り込んでいる三人にゼノが大猪の肉に食らい付きながら聞いた

「……いやだって、コレさっきまで生きていたやつだし……」

「それに目の前であんなのを見せられたら……」

「ちよつと食欲が……」

先ほどゼノが行なった‘大猪解体ショー’を見せられた三人はすっかり食欲を無くしていた

「まあアレだ！騙されたと思って食ってみろって！」

しかし、ゼノは三人の手に半ば無理矢理肉を握らせた

三人はしぶしぶそれを口に入れた



「!!」

「これは!」

「おかわり!」「早いなオイ!」

-----

「でもちよつとシヨックかな」

食事の最中にサラがふと呟いた。

「たったのレベル1のクエストなのにあんなに苦戦したなんて

」

「う、たしかに」

「ゼノくんなんてあっさり倒していたのに」

「いや、だつて三人共初めてだつたんだろ? 俺の時よりずつ

とスゴいよ。」

落ち込みはじめた三人にゼノがそう言った

「俺なんて大猪の突進をまともにくらつて死にかけたからな。」

「ゼノが? 信じられない」

「それに比べたら、マルクは無傷で突進を避けてたし、ナズナは突進を止めた、それにサラは一撃で仕留めた、全部俺には出来なかったことだ。だから自信を持て!」

ゼノは三人の眼を見据えてハッキリといい放った

――――

「そ、それでは　　2ペアともに四つクエストを完了と成ります

」

四人は食事を終えて、その後薬草を5束採取して支部に帰って来た  
そして現在報告を終えたところなのだが

（「ね、ねえ受付の人顔がひきつってない？」）

実は大猪の討伐はレベル1クエストの中でも限りなくレベル2に近い  
難易度の為、間違っても初クエストでこなす依頼ではないのである

「それでは、またのご利用を」

ちなみにこの事実を翌日知った三人にゼノがこっぴどく怒られたの  
は言うまでもない。

18話 討伐（後書き）

ヤベ〜

オチがいまいちだ

え、全体的にいまいちだって？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8444y/>

---

～ 碎牙 ～

2011年12月15日22時46分発行